令和４年度指定　文部科学省事業

「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」

第１年次　実施状況報告書

福岡県立八幡高等学校

【目次】

１．　本校の状況と事業の概要…… 1

２．　事業運営体制（運営指導委員会・コンソーシアム・学校担当者）……２～６
＊申請書の概念図
＊年間事業（申請書の計画書の内容で実施した内容の一覧）

３．　運営指導委員会議事……７～１４

４．　コンソーシアム運営会議議事……１５～１９

５．　教科科目横断型授業……２０～２４

６．　総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト」……２５～５５

７．　会議議事録（文科オンライン会議３回分）……５６～５８

８．　会議議事録（文科対面会議）……５９～６１

９．　先進校視察（訪問日時、場所、人数等の基礎情報のみ）……６２

１０．会議録（一覧）……６３～６４

１１．成果概要図……６５

＊巻末資料
・中学生配布パンフレット
・中学校教員説明用パンフレット
・ポスター
・新学科保護者会説明会
・塾説明会要項

１．本校の状況と事業の概要

（１）学校を取り巻く状況

【地域】

本校が位置する北九州市八幡東区は、官営八幡製鉄所があった地域であり、明治以降、鉄鋼産業を中心に日本の近代化の一翼を担ってきた街である。一方で高度経済成長期を支えた八幡製鉄所がフル稼働したことで「八幡の空には七色の煙が上がる」と言われたほど、大変な公害を生み出したが、そこから女性たちを中心に環境問題を訴える市民運動が巻き起こり、市民・地域全体で改革へ取り組んだ結果、環境問題から回復した。

現在では八幡東区を含む北九州市としては「SDGs 戦略」を明確に打ち出していることも評価され、経済協力開発機構（OECD）によってアジア初の SDGs モデル都市に選定された。八幡東区は SDGs で触れられている生産性やエコシステムの中で、持続的な環境の両立を目指す先進的な地域である。

【学校】

本校の理数科は平成 23 年度から平成 29 年度まで 7 年間スーパーサイエンスハイスクール（以下、「SSH」という。）に指定され、産官学と連携しながら、次世代の科学イノベーション人材の育成に向けて取り組んできた。また、卒業生は大学・企業の研究者も多く輩出しており、約 30 年間にわたる数科における教育は一定の成果をあげている。

一方普通科は、理数科と切磋琢磨しながら教育活動を展開し、特に SSH 指定期間は、著名な研究者等による講演会を共に視聴し、質疑に参加する等、知的好奇心を刺激する機会に恵まれた。また、学問領域を融合させて事象を分析する視点や思考方法、学問に向かう主体性を育成する活動に取り組んでいる。

（２）事業の概要

令和 3 年 1 月の中央教育審議会答申等において、新時代に対応した高等学校教育等の在り方について、高校生の学習意欲を喚起し、可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化や、教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成が提言された。

令和 3 年 3 月 31 日には学校教育法施行規則等の一部を改正する省令等が公布され、高等学校等の特色化・魅力化に向けて、「普通教育を主とする学科」として「学際領域に関する学科」や「地域社会に関する学科」等が設置可能になった。

本校は、新学科の設置に向けた検討等を行う高等学校等として、令和 4 年度「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」において指定（学際領域に関する学科）を受けた。

本事業の指定を受けて、以下の 2 点をねらいとした。

（ア）SSH の研究テーマであった「科学智の統合」の成果を普通科にも汎用させ、現在も組織的に実施している教科等横断型授業や、SDGs 探究（「夢現プロジェクト」）をより魅力のある教育方法、カリキュラムとして開発する。

（イ）学問の専門深化による学問領域同士のコミュニケーションの喪失を克服し、文理分断的思考から脱却した人材を育成する。

理数科が特に SSH 指定の中で探究してきた「科学智の統合」の理念を、新たに設置する学際領域学科に継承・発展させることによって、学問の面白さを実感し、知的好奇心に基づいて主体的に学ぶことで、学問領域同士のコミュニケーションを生み出し、文理分断的思考から脱却し、持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材を育成する。

令和4年度
運営指導委員会・コンソーシアム構成員・学校担当者名簿

〇運営指導委員会

（敬称略）

氏名	所属	備考
石丸 哲史	福岡教育大学 副学長	運営指導委員長
馬渡 寛子	福岡県教育庁 教育振興部 高校教育課長	
島屋 良一	北九州市八幡東区役所 区長	
眞鍋 和博	北九州市立大学 地域創生学群 教授	
栗原 博巳	北九州市立尾倉中学校 校長	
南里 幸一	北九州市立高見小学校 校長	
齋藤 克義	JICA九州センター 市民参加協力課長	

〇コンソーシアム

（敬称略）

氏名	所属	備考
西田 将浩	一般社団法人OCES 代表理事	コンソーシアム運営委員長
上田 ゆかり	北九州市役所 企画調整局 地方創生SDGs推進部 SDGsプロジェクト担当部長	
大山 貴稔	九州工業大学 教養教育院 准教授	
永末 康介	北九州市立大学 基盤教育センター 教授	
阿武 勲	社会起業大学 九州校 運営事務局・教頭	
松岡 俊和	北九州市環境ミュージアム 館長	
松永 康志	シャボン玉石けん株式会社 営業本部 本部長	
西山 慶	大英産業株式会社 人材開発部 広報課 専任課長	
大田 純子	公益財団法人地球環境戦略研究機関 北九州アーバンセンター 研究員	
村岡 由利江	日本国際連合協会 福岡県本部	

○学校担当者

（敬称略）

氏名	所属	備考
菱谷 涼太良	福岡県教育庁 教育振興部 高校教育課　指導主事	
内村 尚俊	福岡県立八幡高等学校 校長	
山本 博文	福岡県立八幡高等学校 参事兼事務長	
板木 俊二	福岡県立八幡高等学校 教頭	
中尾 貴里恵	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 教務部	
山吹 二大	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 進路指導部	
木下 直洋	福岡県立八幡高等学校 主幹教諭 生徒指導部	
廣濱 一郎	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課 課長	
永田 泰寛	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
鳥井 敦子	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
松永 一平	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
大塚 悠衣	福岡県立八幡高等学校 教諭 研修部 新学科推進課	
松尾 史明	福岡県立八幡高等学校 教諭 進路指導部 ガイダンス課	
真子 静佳	福岡県立八幡高等学校 普通科改革支援コーディネーター	

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科（設置（令和6年度））

学際領域学科設置の目的

持続可能な社会をしなやかに根気強く創ろうとする人材の育成

↑

新たな知を生み出す柔軟な創造力

↑

知の統合

自然科学系　＝　人文社会学系

架橋

特色・魅力ある教育の概要

学校設定教科
「知の統合」
教科科目横断型授業

→ **複数の教科科目を融合**
- 学問と社会の繋がりの実感
- 学問の意義の感得
- 多角的な視点・思考の獲得
- 知識から知恵の創造
- 高度な思考力・判断力・表現力の育成

＝

ボーダレスな課題を
分析し真理を
見極める視線

＝

総合的な探究の時間
「夢現プロジェクト」

→ **SDGsの達成に向けて**
- 課題探究的な学習
- 計画に基づく実践行動
- 成果発表会とコンテストへの参加
- 主体的な行動力と旺盛な学びに向かう力の育成

往還・相乗効果

関連機関との連携・協働体制の構築方法

運営指導委員会

指導・助言 ↓

コンソーシアム

八幡高校

コーディネーター

企業・高等教育機関
- SDGsの目標達成に向けた指導助言
- 学際的学びに関する指導助言

行政機関 教育委員会
- 社会の実態の情報提供
- 政治行政的知見の深化
- カリキュラム編成の指導助言

国際機関
- 国際活動を行っている団体による情報提供と専門的知見の深化

地域
- 夢現プロジェクトを介した学校と地域との連携

令和４年度の年間事業

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
５月	・カリキュラムの内容精査① 令和４年度～令和６年度における学校行事も含めた全体的な教育活動の検討	・運営指導委員会と関係機関から成るコンソーシアムとの構築 ・運営指導委員会とコンソーシアムの連携協力体制の検討① ・コーディネーターの役割の検討① ・生徒意識調査内容の検討
６月	・カリキュラムの内容精査② 令和４年度～令和６年度における学校行事も含めた全体的な教育活動の検討 ・公開授業の検討 ・研究発表会の検討	・運営指導委員会とコンソーシアムの連携協力体制の検討② ・コーディネーターの役割の検討②
７月	・学校設定教科「知の統合」の開発① 指導内容の精査と体系化 ・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の活性化① 探究活動の活性化について検討	
８月	・学校設定教科「知の統合」の開発② 年間指導計画の検討 ・「知の統合」と「夢現プロジェクト」を往還する学習方法の検討①	・学校設定教科「知の統合」に関する検討、協議
９月	・学校設定教科「知の統合」の開発③ 効果的な指導方法の検討 ・「知の統合」と「夢現プロジェクト」を往還する学習方法の検討②	・第１回運営指導委員会 ・第１回コンソーシアム運営会議 令和６年度に向けたカリキュラム、教育方法についての指導助言生徒の SDGs 各研究班との協議
１０月	・学校設定教科「知の統合」の開発④ 評価方法の検討	・第２回コンソーシアム運営会議 「夢現プロジェクト」各班探究活動への指導助言 学校設定教科「知の統合」について
１１月	・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の活性化② 校外活動の形態について検討、コンソーシアムの活用について	・第３回コンソーシアム運営会議 夢現プロジェクト選考会、審査・指導助言 ・成果測定 生徒、職員対象の意識調査及び分析 授業力向上アンケートの実施

1 2 月	・総合的な探究の時間「夢現プロジェクト」の活性化③ 探究活動の発表について検討	・第４回コンソーシアム運営会議 夢現プロジェクト成果発表会、審査 指導助言 ・学校設定教科「知の統合」に関する検討、協議
1 月	・カリキュラムの内容精査③ 令和５年度における学校行事も含めた全体的な教育活動の検討	
2 月	・カリキュラムの内容精査④ 令和６年度における学校行事も含めた全体的な教育活動の検討 学校設定教科「知の統合」と総合的な探究の時間の関連を深め効果を高める方法について検討	・第２回運営指導委員会 成果報告、今後の課題 ・校内における生徒、職員対象の意識調査の実施方法に関する検討、協議 ・効果的な広報の実施計画に関する検討、協議
3 月	・カリキュラムの内容精査⑤ 令和６年度における学校行事も含めた全体的な教育活動の検討 学校設定教科「知の統合」と総合的な探究の時間の関連を深め効果を高める方法について検討	・次年度運営指導委員会の企画・検討 ・次年度コンソーシアムの企画・検討 ・次年度構成員委嘱準備

３．運営指導委員会議事

（1）　第１回運営指導委員・コンソーシアム合同会議

【目　的】

本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業)」の活動概要と状況を運営指導委員およびコンソーシアム構成員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】

令和４年９月２９日（水）　９時００分～１１時００分

【場　所】

本校　会議室

【次　第】

１　学校長挨拶
２　県教育委員会挨拶
３　運営指導委員・コンソーシアム構成員紹介並びに本日出席者の紹介
４　運営指導委員長選出
５　「知の統合学科」(本校における普通科改革）について
６　教科科目横断型授業について
７　総合的な探究の時間について
８　質疑応答及び指導助言
９　今後の取組について
１０　その他

【参加者（敬称略)】

［運営指導委員］

野本　準二（福岡県教育庁高校教育課)；野瀬　昌弘（北九州市八幡東区役所)；栗原　博巳（北九州市立尾倉中学校)；齋藤　克義（JICA 九州センター市民参加協力課)

［コンソーシアム構成員］

西田　将浩（OCES)；上田　ゆかり（北九州市役所企画調整局地方創生 SDGs 推進部)；永末康介（北九州市立大学基盤教育センター)；阿武　勲（社会起業大学九州校)；松永　康志（シャボン玉石けん株式会社)；大田　純子（地球環境戦略研究機関)；村岡　由利江（日本国際連合協会福岡県本部)

［会議出席者］

菱谷　涼太良（福岡県教育庁高校教育課)；内村　尚俊（校長)；山本　博文（参事兼事務長)；板木　俊二（教頭)；中尾　貴里恵（主幹教諭)；木下　直洋（主幹教諭)；山吹　二大（主幹教諭)；廣濱　一郎（教諭)；松尾　史明（教諭)；永田　泰寛（教諭)；鳥井　敦子（教諭)；松永　一平（教諭)；大塚　悠衣（教諭)；真子　静佳（普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】

(委員)；「教科科目横断型授業」や「夢現∞プロジェクト」といった取組をしている学校は県内もしくは全国でどういった位置づけになるのか。少ないのか。

(学校)；今からだんだんと普通科を改革していこうとする動きは出てくる。令和元年ごろから、「普通科を改革していかなければ。高校生の７割が普通科に在籍している。世界の中の日本をもっともっと押し出していく人材をつくらないといけないのではないか。」という発想から、普通科を改革しようとする動きがあった。しかし我々はそれより以前から

普通科を変えようと思っていた。今回、内容が合致したためその事業に参画することとなり、全国で１９校が採択されている。ある程度の下地や今までやっていた経験がないと、いきなり取り組むのは難しいと思うが、これから少しずつ出てくるのではないか。現時点で取り組んでいる学校は少ないが、事業として進んでいるのは間違いない。

（委員）；背景としては理数科があり、課題研究もしているというのがあったからか。

（学校）；はい。そういった背景である。

（委員）；普通科改革支援事業に採択された１９校の中で、九州では八幡高校以外にどこがあるのか。

（学校）；１９校のうち約半数強が地域社会に関する学科。九州では、北九州市立高校。長崎県松浦高校。宮崎県飯野高校。松浦高校は「キャリアプランニング」や「まつなびプロジェクト」等、地域課題解決型の普通科。飯野高校はグローカル協創探究。いずれも地域社会に関する学科である。

（委員）；こういった取組は長年実施してきたとのことだが、大きく推し進めるようになったのはここ数年なのか。

（学校）；平成２９年度は「やってみよう」という教員が１人～３人であった。合わせてSSHの「科学智の統合」に沿った授業もする中で、生徒もおもしろがったというのが始まりである。もともとはＳＳＨがないと始まっていない。そこからだんだんと広がり、令和元年度からは「失敗してもいいからみんなでやってみよう」となり全員で取り組んでいる。

（委員）；「教科科目横断型授業」の課題はあるか。また、これだけ学際的な授業を行っていると、自然と総合的な探究の時間も学際的になるのではないかと思うが、その辺りの関連はあるか。例えば「おいSea食堂」の探究は学際的になっているのか。

（学校）；「教科科目横断型授業」は、これまでは「とにかくやってみよう」という流れで行ってきた。生徒からも好評で、皆楽しんで授業を受けており、目には見えない力になっていると思う。この取組では「１＋１＝２」ではなく「１＋１＝３以上あるいは無限大」の効果を生み出したい。単につなげばよいというわけではなく「１＋１＝３以上あるいは無限大」となる効果を生み出すような授業を創り上げることが、今後の課題である。これからは「こういうところをこうしたらもっといいよね」というシビアな意見を言い合えるような雰囲気をつくらなければならない。本当に意味のある、無限大の効果を生み出す授業を作り上げていく。また、「教科科目横断型授業」が総探に生きてくるのではないか、というのはまさしくおっしゃるとおりである。「教科科目横断型授業」というのは、本当は血や肉として身につくもの。複数の目線・視線で考える「教科科目横断型授業」の考え方そのものが総探の活動に間違いなくつながっていると考える。またそれをねらっている。

（委員）；「知の統合学科」という名前は変更の予定はあるのか。

（学校）；最終的には来年の秋ごろに「知の統合学科」での確定を目指したい。ネーミングについてもよく検討した。「学際」という言葉を入れなかったのは「学問の領域を超える」という意味が中学生に分かるのかという理由から。「探究」という言葉を入れなかったのは、本校ではすでに３０年間理数科で課題研究を行っているうえに、新しい学習指導要領にも組み込まれているという理由から。

（委員）；「知の統合科」とせずに「知の統合学科」とした意図は。

（学校）；もともと「知の統合学」にSSHは感銘を受けており、それを１つの学問として捉えたいという思いがある。

（委員）；理数科は現状のまま継続するのか。もしくは段階的に変革していくのか。

（学校）；新学科設立にあたり検討した。理数科自体に３０年の実績があり、研究者も多く輩出している。それを考えた際に「理数科も大切にしたい」という思いがあり継続することとした。ある意味「スペシャリスト」を育てる要素も必要なのではないかと感じる。「知の統合学科」はスペシャルな要素も目指すけれども、どちらかというとゼネラリストを育てる学科となると考える。

（委員）；探究活動におけるスキルトレーニングを重要視することに共感する。「夢現∞プロジェクト」の中間発表に参加した際に感じたことは、課題を見つけ、現状の情報収集をするところまでは非常にスムーズに進むが、それをもって地元にアンケート調査をしたりアクションを起こしたりするとなった際に、少し弱いなと感じる。アンケートをとるスキルや統計をとるスキル、また膨大な量の情報から本当に必要なものを選択するといった「夢現∞プロジェクト」に限らず、どんなトピックにも応用できる基礎的なスキル指導も横断的に行っていくべきではないかと感じる。「アクションを起こす」「発表する」等のスキルは全体的に伝えていかなければならない。

（学校）；スキルトレーニングについては１年生の後半部分で取り組んでいるが、流動的な側面もあり、何がベターなのかを検証しながら今後創り上げていく必要があると考えている。

（委員）；八幡高校で行っている活動そのものを社会に伝えていく必要があると考える。外部へのＰＲというのも、本事業の１つにしてもいいのではないか。アドバイスや協力できることがあれば、言っていただければと思う。

（学校）；色々な場面での発信も視野に入れている。皆様のお力をいただきながらと考えているので、その際はご協力をお願いしたい。

（委員）；「教科科目横断型授業」と「総合的な探究の時間」とを今後どのように関連付けていくか。

（学校）；「教科科目横断型授業」で育てたい多角的な視点や「学問はおもしろいものなのだ」という感覚を腹に落とし込むレベルで実感させたい。（「教科科目横断型授業」の例を挙げる）「複数のものの見方」「勉強本来の意義」が自然と身体に入ってくる。それが「総合的な探究の時間」の SDGs 探究活動に自然と発揮されるようにするというのがねらいである。SDGs の実践行動をとっても、１つの視点からでは不十分であり、複数の視点から見えてくるものがあるかもしれない。「教科科目横断型授業」はそういったことに気付く発想につながっていくと考える。

（委員）；八幡高校での取組を継続するためには、生徒のレベルの高さもある程度必要である。生徒は新たな授業のおもしろさを感じる一方で、保護者は「〇〇大学に何人合格しました」という現実的な観点で高校を見ている部分もある。そのバランスが非常に難しいのかなというふうに感じる。

（学校）；まさしくそのとおりである。チラシにもあるように、「教科科目横断型授業」や「夢現∞プロジェクト」を経験してきた卒業生の進学実績は、それを経験していない卒業生の進学実績とほぼ変わっていない。また受験指導には自信をもっており、現在もしっかり行っている。ただ同時に、教科の本当のおもしろさや美しさを教えることも、遠回りのようで生徒たちの力につながっているのではないかと考え、今回の発想にいたっている。現実的で貴重なご意見に感謝申し上げる。

（委員）；八幡高校はトップダウン・ボトムアップ。生徒の希望や要望がうまく連携していると思うが、指導にあたる教員のコンセンサスはどのようにとっているのか。教員も楽しみながら取り組める事業にしてほしいと思う。

（学校）；おっしゃるとおり大変ではあるが、探究活動に関しては、枠組みを作っていく中で生徒たちの方が自主的に動いていくような場面もあり、教員から見ても生徒たちのポテンシャルの高さを感じている。教員間でも情報共有し互いに相談し合って進めているが、今回新たにコーディネーターも設置されたため、負担は部分的に軽減されていくのではないかと感じる。探究活動で活躍した生徒たちを中心に、大学入試においても総合型選抜や推薦型選抜でも多く実績が上がっており、進学面にも関連づいていると感じる。

（学校）；効果と労力の関係を考えながら、少しでも教員の負担が小さくなるように進めたいと思っている。

（委員）；教科間の横断もおもしろいと思うが、その中に一般企業も合わせてみることによって自分たちの生活感と連携し、新たな学びの楽しさの発見にもつながるのではないか。また、教員の負担の軽減にもつながればとも思っている。また「夢現∞プロジェクト」の探究の進め方について言及すると、将来自分たちがこの世の中をつくっていく上で、

「こんな社会になったらいいな」という社会のあるべき姿をまず発想させる。それと現状との差が問題である。課題を発見するときにこのようなやり方をすると自分事として捉えることができ、さらに楽しく自由な発想で探究活動に向かうことができるようになるのではないかと考える。

（学校）；ご意見いただいたことを取り入れながら、また企業の方にもご協力いただきながら進めていきたい。貴重なご意見に感謝申し上げる。

（委員）；要望になるが、資料等はデータでも配信をお願いしたい。「伝説の授業採集」（出版社：宣伝会議）の紹介。建築端材を活用した SDGs の取組紹介。

（学校）；福岡教育大学石丸副学長の感想とアドバイスをご紹介する。八幡高校の新学科設立の趣旨は ESD と重なる部分があり、大学で求められていることでもある。ここまで準備を進め実行をしているので、今回自然と採択されたのだろう。学問の細分化と同時に統合化を推進するべきだという発想は本当に大切だと思う。教科科目横断力をつける際に、生徒の“やらされ感”を生み出さないように、生徒自らの主体的な学びの文脈を大切にしてほしい。成果指導の１つとして、生徒へのアンケートを通した校内での学びの成果をみる指標があるとよい。そこから生徒の変容がみえてくるものを評価指標に入れるとよいと思うという指標についてのアドバイスをいただいた。

（2）　第２回運営指導委員会

【目　的】
　本校における「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業)」の令和４年度成果を運営指導委員に報告し、改善に役立てる。

【実施日】
令和５年２月２０日（月）　１５時００分～１６時２０分

【場　所】
本校　誠鏡会館

【次　第】
１　学校長挨拶
２　県教育委員会挨拶
３　運営指導委員長挨拶
４　運営指導委員紹介並びに本日出席者の紹介
５　教科科目横断型授業　成果報告
６　総合的な探究の時間　成果報告
７　令和４年度事業の総括
８　質疑応答及び指導助言
９　今後の取組について
１０　その他

【参加者（敬称略)】
［運営指導委員］
石丸　哲史（福岡教育大学)；野本　準二（福岡県教育庁高校教育課)；野瀬　昌弘（北九州市八幡東区役所)；南里　幸一（北九州市立高見小学校)；齋藤　克義（ＪＩＣＡ九州センター市民参加協力課)
［会議出席者］
菱谷　涼太良（福岡県教育庁高校教育課)；内村　尚俊（校長)；山本　博文（参事兼事務長)；板木　俊二（教頭)；山吹　二大（主幹教諭)；木下　直洋（主幹教諭)；廣濱　一郎（教諭)；永田　泰寛（教諭)；鳥井　敦子（教諭)；松永　一平（教諭)；大塚　悠衣（教諭)；松尾　史明（教諭)；井手　素子（教諭)；真子　静佳（普通科改革支援コーディネーター)

【協議・意見交換】
(委員)；特に「教科科目横断型授業の評価」についてお話しする。コンソーシアムの会議にもこれまで参加したが、「夢現∞プロジェクトの評価」については今後改善という所まで来ており、一定程度目途が立っているという風に考えていいのではと感じている。「教科科目横断型授業」に関しては、学校設定教科としてそれを設定する趣旨に立ち返ることからではないかと思う。ロジックモデルの中間アウトカムの箇所を見ると「生徒の資質能力の向上」「多角的なものの見方・捉え方ができる」「学問のおもしろさ・美しさを実感できる」といった部分を「教科科目横断型授業」と「夢現∞プロジェクト」を往還しながら実現するというのが本来の趣旨であった。そこから考えると「教科科目横断型授業」については、個別の科目が複数協働して「多角的なものの見方・捉え方ができる」という部分の成果を測ることが主筋になってくるのではないか。学校側もそこには行き付きながらも、どのように測っていくのかに苦慮しているのではないかと思われるが、まだどの学校も取り組んだことがない難題ということで、トライアンドエラーを重ねて

作り上げていければと思っている。また、測定に関しては教育心理学の分野における知見が有効なのではないかと考える。例えば、運営指導委員会やコンソーシアム構成員の大学の先生方の意見を聞いてみることや、最近ではコンピテンシー等を計測するアセスメントが出ており、エドテック導入の助成事業の対象になっているものもあるので参考にしてみてはどうか。実施されているものを即ち導入ということではないが、参考ということで企業へ相談してみるのも１つの手段ではないか。

（学校）；以前のコンソーシアム運営会議でも、教育心理学の側面からというアドバイスを頂戴した。それに加えて、本日いただいた企業へ相談してみる方法についても検討してみたいと思う。貴重なご意見に感謝申し上げる。

（委員）；ロジックモデル最終アウトカムの箇所に目指す人材に関して３点挙げられているが、それらが具体的にどういう人材なのかという部分を掘り下げることが、評価と直接は関連づかないかもしれないが、実際に子どもたちが社会に出て活躍していくために学校でどのようなことを学べばよいのかということをクリアにすることにつながるのではないかと思う。また、総合的な探究の時間では、まず仮説を設定し、次にそれを検証するための情報を収集し、そして実際に検証し仮説と照らし合わせ、合っていれば実践に移すという流れがあるが、それは社会人がＰＤＣＡサイクルを回すのと類似する部分がある。探究の学習を高校生のうちに経験することは、実社会に出たときに役に立つと感じているため、八幡高校の取り組みは有効だと考えている。実社会では「課題を見つけること」が大変重要であるが、それが難しい。課題の見つけ方を間違えてしまうと、その課題を解決したところで最終的な目標の達成に至っていないことがある。課題を正しく特定するための知識やアプローチの仕方、場合によっては、その課題とそれに関連する人々の意見をどうまとめていくかというコミュニケーションが重要になってくる。そういったところに着目して取り組めるようになると、よりおもしろい活動になるのではないだろうか。

（学校）；３月には、現２年生と現１年生の交流を予定しており、その中で、本年の探究班が「何ができなかったか」を伝える機会があるので、それを受けて１年生がどのように課題を見て着手していくのかが１つの鍵になると感じている。課題や先行研究を見つけていくことに今年度は苦労したので、来年度以降はそのあたりを探っていきたいと思っている。

（委員）；小学校教育の中でも教科横断的授業を実施している。例えば、５年生の理科の学習で植物の成長について実験を行いながら学んでいく。それと社会科の農家で働く人々に関する学習を結びつける。実際に年間を通して稲を育てていく（理科）中で、米を育てることの苦労や喜び（社会科）を経験するという学びを実践している。その過程において、ペーパーテストでは測れないような評価に関しては、その時々の子どもたちのノートやワークシートを基にしながら、それぞれの教科に当てはまる側面を評価している。「夢現∞プロジェクト」では児童虐待について探究していた生徒が自分たちで作成した紙芝居を本校に持参してきたが、その時の生徒たちの様子は生き生きとしていて、彼らの意思を感じることができた。小学校でも、主体的で対話的で深い学びにつなげていくことを大切にしながら教育活動を行っており、一つひとつの活動がどのような意味をもっているのかということを、教員側で見極めながら評価しているので、参考になればと思う。

（学校）；生徒がその時々で残したものを評価に活用する観点を、本校ではどのように取り入れられるか検討したい。高校でも「新たな学びプロジェクト」において他校の取り組みが掲載されていたりするので、そのあたりも参考にできるのではないかと考えることができた。

（委員）；市役所の評価の観点からお話しする。市役所では２０年ほど前から行政評価を取り入れている。当初は事務事業を全て評価するという莫大な作業を行っていたが、負担があまりにも大きいことから段々と変え、事務的な負担を軽減しながらここまで実施している。その中で、評価シートを毎年少しずつ変えていることから経年比較ができないとい

う面もあり、市役所でも評価方法には苦労している実態がある。内容は、自身で評価の指標を決めてそれを自己評価し、最終的には議会に見せるところまで行っている。もう一つは人事評価である。業績目標評価というが、年度当初に業績目標を立て、中間面談で進捗を確認し、最終的には自己評価と上司による評価を行っている。当初の指標が甘いと達成度は高くなる傾向があるため、目標の立て方を丁寧に行うことが大切である。また別件であるが、これまでの話の中で「地域」という言葉が多く出てきたが、地域が高校に何を望んでいるのかという視点に立った話がよく見えなかった。高校が行っていることを地域はどう受け止めて、高校は地域のために何ができるのかということをうまく打ち出せるとよいのではないか。地域と高校がお互いにwin-winの関係になれると、地域に溶け込んだ八幡高校という姿ができるのではないかと思う。

（委員）;「教科科目横断型授業の評価」に関しては、まず「何のために評価をするのか」ということに立ち返る必要がある。「評価」は、生徒からすると自己の学習の到達度を把握できるものになっている。また教師からすると、生徒がどれくらい理解度を深めることができているか、また何が足りなかったのかということを振り返り、授業改善に用いることができるものになっている。このように評価には「生徒主体型」と「教師主体型」がある。そのどちらで現在八幡高校が悩んでいるのかによるが、本日の話を聞く中では「生徒主体型」の見方で悩んでいるように見受けられる。生徒に「何を達成してほしいのか」ということをこれから考えていく必要があるのではないかと思う。横断型授業をするときに、トータルでの目標はもちろんあると思うが、それぞれの教科でも達成したいことがあるのではないかと考える。それぞれの評価規準を見取るために何を活用するか。それは、例えばワークシートであったり作品を残すことであったり、個人の端末に残る成果物であったりする。その中で、ある教科の目標が「教科の内容に関すること」なのか、「興味・関心、態度に関すること」なのかによっても、最適な見取り方は変わってくるのではないかと思う。また、必ずしも教師が評価を行うのではなく、生徒の自己評価でも良いという捉え方ができる場面もあるかと思う。評価方法のどの部分で悩んでいるのかということを、改めて学校内で話し合ってはどうか。また、ここ半年ほどで「文理分断型からの脱却」について急速に叫ばれるようになってきた。これを抜け出す方法について議論がなされており、大学側の入試制度の変革、つまりは総合型選抜で文理横断型の人材を募集している状況が生まれてきている。本日の報告を聞いて、八幡高校の「総合的な探究の時間」「教科科目横断型授業」においては文理分断型からの脱却が自然と図られており、これからの社会に求められている人材の育成がなされていることを感じることができた。

（学校）;我々が生徒に何を求めているのか、どういう生徒を育てていきたいのかという点について、もう一度教員同士で検討し深めていく必要があると感じている。また、国の動向等について教示いただき感謝申し上げる。実際に生徒が挑戦することになる総合型選抜に向けて、本校で行っている取り組みが良い意味で力を出せていければと思っている。

（委員長）;「夢現∞プロジェクト成果発表会」の様子から、八幡高校の生徒たちの向かっている姿がよく分かる。これから必要とされるコンピテンシーの考え方を見て取ることができる。高校教育を変えるためには、大学入試を変える必要があるとよく言われるが、コンピテンシーを大学入試でどう評価できるかが難しい部分である。そのコンピテンシー評価について是非高校教育でも取り組んでもらいたい。それを大学側もしっかりと受け止めていくことで、よりよい大学入試・よりよい高校教育に向かっていくのではないかと考えている。しかしながら、コンピテンシーは、良質なコンテンツによって支えられるものであって、コンピテンシーだけを醸成するということは夢物語である。そういった意味で、良質なコンテンツこそが高等学校で提供されるものである必要がある。良質なコンテンツとは、それそのものではなく、その取扱いではないかと考えている。八幡高校の「教科科目横断型授業」は、知とは本来こういうものではないかということが分かる取り組みである。ただし、横断するのは生徒自身であるということが重要である。生徒が自ら主体的に横断していく姿を育成する必要がある。そこで「教科科目横断型授

業」と「夢現∞プロジェクト成果発表会」がセットであるという考え方はどうか。「教科科目横断型授業」を日頃から行っているからこそ「夢現∞プロジェクト成果発表会」が有意義なものになろうかと考える。「教科科目横断型授業」をインプットとし、「夢現∞プロジェクト成果発表会」がアウトプットになるのではないだろうか。その中で、アウトカムを測るための評価が必要になると思うが、その際に大切なのがゴールを設定することだと感じている。グローバルな目標をローカライズ、パーソナライズしていく中で、ゴールを自ら設定し、そこにどこまで自分が到達できているのかを生徒が自覚できるような目標を作ることが、評価に向かう作業の一つになるのではないかと考える。

４．コンソーシアム運営会議事

（1）　第２回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和４年１０月５日（水）　１４時１５分～１５時１５分

※同日、会議終了後に総合的な探究の時間「夢現∞プロジェクト SDGs 探究ガイダンス」を実施。コンソーシアム構成員には活動見学・生徒との懇談会に参加いただいた。

【場　所】

本校　会議室

【次　第】

１　学校長挨拶
２　コンソーシアム運営委員長選出
３　「夢現∞プロジェクト」本時の詳説
４　学校設定教科「知の統合」の評価について
５　その他

【参加者（敬称略）】

［コンソーシアム構成員］

西田　将浩（OCES）；上田　ゆかり（北九州市役所企画調整局地方創生 SDGs 推進部）；大山　貴稔（九州工業大学教養教育院）；永末　康介（北九州市立大学基盤教育センター）；阿武　勲（社会起業大学九州校）；松岡　俊和（北九州市環境ミュージアム）；松永　康志（シャボン玉石けん株式会社）；大田　純子（地球環境戦略研究機関）；村岡　由利江（日本国際連合協会福岡県本部）

［会議出席者］

菱谷　涼太良（福岡県教育庁高校教育課）；板木　俊二（教頭）；中尾　貴里恵（主幹教諭）；木下　直洋（主幹教諭）；山吹　二大（主幹教諭）；廣濱　一郎（教諭）；松尾　史明（教諭）；永田　泰寛（教諭）；鳥井　敦子（教諭）；松永　一平（教諭）；大塚　悠衣（教諭）；真子　静佳（普通科改革支援コーディネーター）

【協議・意見交換】

・　学校設定教科「知の統合」の評価について

（学校）；教科科目横断型授業（学校設定教科「知の統合」）の評価方法が今後の課題である。現在は、主たる科目の中で評価しているが、今後は横断型授業そのものがひとつの教科となる。その在り方についてこれから校内で検討し試行していくので、その都度ご助言をいただければと思う。

※同時点では出席者に対し現状説明を実施。継続して評価方法の研究・開発を進める。

（2）　第３回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和４年１１月９日（水）　１６時３０分～１７時３０分

※同日「夢現∞プロジェクト選考会」実施後に開催。コンソーシアム構成員には、審査員として選考会に参加いただいた。

【場　所】

本校　誠鏡会館

【次　第】

１　学校長挨拶

２　審査・運営について

３　「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容について

４　その他

【参加者（敬称略）】

［コンソーシアム構成員］

西田　将浩（OCES）；大山　貴稔（九州工業大学教養教育院）；永末　康介（北九州市立大学基盤教育センター）；阿武　勲（社会起業大学九州校）；松永　康志（シャボン玉石けん株式会社）；西山　慶（大英産業株式会社）；村岡　由利江（日本国際連合協会福岡本部）

［会議出席者］

菱谷　涼太良（福岡県教育庁高校教育課）；山本　博文（参事兼事務長）；山吹　二大（主幹教諭）；廣濱　一郎（教諭）；鳥井　敦子（教諭）；大塚　悠衣（教諭）；真子　静佳（普通科改革支援コーディネーター）

【協議・意見交換】

・　「夢現∞プロジェクト選考会」審査に関して

（委員）；評価項目「④発表」では「声が小さく、全く聞こえない。原稿をただ読むだけで聴衆の方を全く見ない。」が得点２点の基準となっているが、そのような班は１つもなく、どの班も５点が付けられるように感じた。評価基準については今一度検討してもよいのでは。

（委員）；総合的な探究の時間の指導要領解説に記載の評価ルーブリックを参考に、評価項目について再検討してもよいかもしれない。

（委員）；今回の評価項目では「①課題設定」に「情報収集力」が組み込まれているが、「情報収集・調査」にあたる内容は大学でも重要な評価項目として認識されている。「情報収集・調査」は独立した評価項目として立ててもよいのでは。また、早い段階で生徒へ評価項目を提示すれば、それが発表内容にも反映されるのではないか。

（委員）；「夢現∞プロジェクト」という総合的な探究の時間に取り組むことで生徒たちにはどのような力が身につくか・なぜ取り組むのかということは、生徒たちには提示されているか。

・　「夢現∞プロジェクト選考会」運営に関して

（委員）；３会場に分けたこと、会場収容人数は丁度よいと感じた。生徒たちからの質問・意見が出にくい空気がある。発言しやすい仕掛けがあればよいのでは。

（委員長）；序盤では審査員が積極的に質問をするようにする。そうすると、３班目あたりから生徒たちの手が挙がり始め、質問が出やすい流れにつながる。

（委員）；１年生に２年生の発表を見せ、質問をさせる意図（ねらい）をはっきりさせるべき。生徒はそれを理解して臨んでいるか。

（委員）；今回の選考会発表班の会場割（発表順）は、各班の探究内容のレベルに応じて、教員による操作が入っているのか。

（学校）；同じ SDGs ゴール番号に取り組んでいる班がある場合は同会場になるよう操作をしているが、探究内容のレベルに応じた割り振り等は行っていない。発表順に関しては生徒による抽選結果である。
（委員）；７限の班別講評の際、後方は審査員の声が聞き取りづらかった（体育館）。自分たちの発表に対するコメントを聞く機会であるため、環境について再考してはどうか。

・　「夢現∞プロジェクト」テーマ・内容に関して
（委員長）；１グループの人数は８人がベストなのかどうか。他校では、１人で取り組む生徒もいれば、３・４人で取り組むグループもある（例：小倉、佐世保西、自由が丘）。生徒一人ひとりの関心に寄せるためには、必ずしも人数を８人と固定しなくてもよいのではないか。
（委員）；生徒との懇談の際に、第１希望が叶わず、第２・第３希望のテーマで組まれた班では研究が円滑に進んでいないところもあるという話を聞いた。
（学校）；教員の人数や教室の数という物理的側面での課題があるが、検討していく必要がある。
（委員）；多くの班が調査・研究の段階でアンケートを実施しており、生徒たちがそれに疲れている印象がある。過去に実施してきたアンケートの結果や「夢現∞プロジェクト」の成果を下級生たちに引き継ぐことができれば、年々研究の成果を上げることができるのではないか。
（学校）；現状は正確な引継ぎは実施できていない印象がある。生徒たちが作ったものを遺していけるように学校も努める必要がある。
（委員）；「アクションプラン」という言葉の捉え方を広げてはどうか。「アンケート→ポスター等の刊行物」というアクションプランが多かったように感じる。周囲への意識改革（啓発）として無理に形あるものに繋げなくとも、研究の結果自分たちの中で行動変容（〇〇を控える等）があれば、それも１つのアクションとして捉えてもよいのではないか。
（委員）；研究結果を焦点化させたものが、発表段階で飛躍しすぎたものにならないよう、教員が指導すべきである。
（委員）；探究のゴールは明確か。外部コンテストへの出場がゴールなのか、SDGs の達成がゴールなのか、それを生徒たちは理解しているか。
（委員）；企業側にプレゼンの依頼をしてみてはどうか。プレゼンの例を見せることで生徒の手本になる。

（３）　第４回コンソーシアム運営会議

【実施日】

令和４年１２月１４日（水）　１６時４０分～１７時３０分

※同日「夢現∞プロジェクト成果発表会」実施後に開催。コンソーシアム構成員には、審査員として選考会に参加いただいた。

【場　所】

本校　誠鏡会館

【次　第】

１　学校長挨拶

２　審査・指導助言について

３　その他

【参加者（敬称略）】

［コンソーシアム構成員］

西田　将浩（OCES）；上田　ゆかり（北九州市役所企画調整局地方創生 SDGs 推進部）；大山　貴稔（九州工業大学教養教育院）；阿武　勲（社会起業大学九州校）；松永　康志（シャボン玉石けん株式会社）；西山　慶（大英産業株式会社）；大田　純子（地球環境戦略研究機関）；村岡　由利江（日本国際連合協会福岡本部）

［会議出席者］

菱谷　涼太良（福岡県教育庁高校教育課）；板木　俊二（教頭）；中尾　貴里恵（主幹教諭）；山吹　二大（主幹教諭）；廣濱　一郎（教諭）；松尾　史明（教諭）；井手　素子（教諭）；永田　泰寛（教諭）；鳥井　敦子（教諭）；大塚　悠衣（教諭）；真子　静佳（普通科改革支援コーディネーター）

【協議・意見交換】

・　生徒の発表について

（学校）；前回のコンソーシアム会議で頂戴したご意見を参考に、採点表を改訂し、生徒へフィードバック済である。成果発表会を終えて課題だと感じていることは、発表に焦点を当てすぎで内容が薄い・ポスター班とステージ班で温度差があること等。これからレポートを書かせる中で活動のまとめを行っていく。

（委員）；生徒はどのように課題設定したのか。

（学校）；自分に引き寄せてゴールを選び、８名の中からアイデアを出させている。

（委員）；課題→アクションの間にもう１ステップ必要。一般的（社会的）な課題をローカルなものにする。（例：電気を節約→八幡高校ではどこが多く消費しているのか）誰に対してのどのような課題なのか、アクションなのかを焦点化すべき。

（委員長）；テーマ設定について、テーマを評価項目に沿って教員が評価するという仕組みがあるとよい。

（委員）；生徒は「夢現∞プロジェクト」に対して、どのくらい時間をかけられるのか。負担になっていないか。（目標をどこに設定するのか）

（学校）；週に１回の「総合的な探究の時間」が与えられる。

（学校）；提出期限を設定して、間に合うように考えさせる。昼休みや帰宅後の時間も利用している。作業量のコントロールは今後していくべき。

（委員）；今回の発表は評価に関わるのか。

（学校）；SDGs クエストみらい甲子園の選抜チームとして選出。学校側の評価は変わらない（記述評価）。総合型選抜を受験する場合に活用できるようにするため、これから取り組むレポート作成のフォーマットは、いくつかの大学の総合型選抜入試のエントリーシートを参考に作成した。

（学校）；生徒自身が外部のコンテストに応募することもある。自主性を育てるという方針。本年度も一件自主的にエントリーする班がある。
（委員）；コンテストに出場していない生徒に対し、コンテストに出場した生徒がいることをフィードバックするとよい。

・　審査の在り方について
（学校）；（新旧採点表について）新学習指導要領を踏まえて採点表の項目立てを変更した。点数の違いがわかる箇所を強調し、八高オクタゴンに沿って項目を提示。生徒には事前に評価基準を提示して発表に向かった。
（委員長）；課題解決をする上での過程をどこで評価するか検討するとよい。先行研究が十分になされているのかという視点があるとよりよい。
（委員）；生徒が疑問を持った箇所を洗い出す→SDGs のどのゴールに当てはめるかを考えると「①課題設定」の理由が明確になる（身近なもの・自分事になる）。「②情報の収集・蓄積」に先行研究を含めるとよい。「③整理・分析・まとめ」に研究結果の提示の仕方を含めるとよい。「③整理・分析・まとめ」の「正確に分析し」→「専門領域（経済学・心理学）」と関連、「④表現」の「適切な図表等」→「行動心理学」の視点を盛り込むとよい。
（委員）；身近なものに焦点を当てると自分事になる。
（委員長）；「③整理・分析・まとめ」の「正確に分析し」→教科と結びつけるとよいのではないか。
（委員）；「連携力・実行力」という要素が消えた。プロセスを通じて得た、知識以外の効果（生徒の人間関係、達成感）を採点表に含めるとよいのではないか。

・　その他
（委員）；地島での実証実験の紹介（資料を提示）。八高の卒業生もプロジェクトに参加している。講演や授業にも赴くことができる。
（委員）；小倉に「SDGs ステーション」を設立する。人をつなぐ組織を立ち上げる。生徒・企業などの依頼を受けて行う。次回のコンソーシアムで詳細を提示。

5. 教科科目横断型授業

（1） 概要

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。

なお、教科等横断型授業については、平成 29 年度から 6 年間にわたって実施し、さらに、令和元年度からの 4 年間は全教員で取り組んでおり、多種多様な教科科目の組合せでバリエーションに富む内容を行ってきた豊富な実績がある。この取組はベネッセの「VIEW21」やリクルートの「キャリアガイダンス」でも紹介されている。

（2） 取組内容

全学年にわたり、学校設定教科「知の統合」(各学年 1 単位、合計 3 単位)を開設し、教科等横断型授業を実施する。

これまでも教科等横断型授業を実践してきており、主体的対話的で深い学びに深化させ、体系的に整理するために研究開発を行う。

(例)

・学習の目標 … 現代医療の在り方を探究する契機とする
・学習の内容 … 多角的アプローチから日本人特有の死生観、生と死の科学性・社会性を分析し、現代医療の展望と限界を考察する
・学習の方法 … 生物、公民、英語の教員が同教室同時間で授業を実施
・テ　ー　マ …「臓器移植」
・生　　物 … 拒絶反応を抑える免疫抑制剤の使用を学習の教材とした免疫の学習
・公　　民 …「臓器移植法」の成立過程や改正点、他国との相違、法律的な死としての脳死、デカルトから始まる心身二元論などの観点から学習
・英　　語 … 日本人ほどに脳死に違和感を覚えない西欧の文化風土や死生観、死に関する語彙の相違などの観点から学習

（3） 令和４年度実施報告例

実施教科	学年	テーマ
英語・化学・生物	3年生	バイオミメティクス
英語・日本史	2年生	英語で落語を演じよう～Hachiko Rakugo Show～
現文・地理	2年生	虎と化した李徴の咆哮する風景
生物・物理	3年生	ミツバチのコミュニケーション ～ミツバチの情報伝達について、目の構造に焦点を当て理解を深める～
地理・化学・地学	3年生	土
生物・英語	3年生	２００８年ノーベル化学賞を受賞したＧＦＰの功績 ～光らせることで何が可能になったのかを理解する～
家庭基礎・地理	2年生	水
英語・歴史総合	1年生	「 A good leader の資質とは 」Nelson Mandela 氏を知ろう
化学基礎・国語	1年生	化学とポエム
家庭基礎・数学	2年生	資産形成
体育・物理	2年生	無回転シュートを蹴る！
英語・数学	3年生	πが無理数であることの証明、無限
数学・国語	3年生	文字、数字⇒思考
生物・数学・英語	3年生	科学と対数～対数処理されたグラフの 価値を実感し、生存曲線の理解をふかめる～
生物基礎・世界史	2年生	歴史を動かした貧者のパン～ジャガイモ～

〈卒業生の感想〉

・教科科目横断型授業は、様々な視点から物事を見ることができるとても有意義なものだと私は考えています。

・推薦入試の対策にもつながると思うのでもっと増やしてほしい。

（4） 教科科目横断型授業の実際の例

主たる教科科目	地歴（地理B）	担当者	川津　佐代子
横断する教科科目名担当者名		化学・地学　　大野　辰晃	
実施学級・日時	3年1組３７名（男子２３名 女子１４名）令和4年１１月４日（金）５時限 3年2組３７名（男子２２名 女子１５名）令和4年１１月１０ 日（木）３時限		
内　容	テーマ　：　「土」 農業や気候との関わりが深い「土」について、地質年代や構成元素まで分解して考える。同じ名称の土でもその性質は違っており、その性質の違いが農作物生産や食糧問題の解決を困難にしている事実に気がつかせ、今後予測される食糧危機の解決策を模索させる。		

	学習内容・活動
導入（5 分）	「土」とは何か。定義・構成物（大野教諭）
講義１：地理歴史科　地理 B（10 分）	地理 B における土の取り扱いとインドネシアとコンゴ民主の対比について（川津）
講義２：理科　化学・地学（20 分）	同じ名称の土壌でも、地質年代・構成元素が違うことについて（大野辰教諭）
講義３：地理歴史科　地理 B（10 分）	食糧問題の解決策について（川津）
まとめ（5 分）	人口爆発と食糧増産の関係について （川津・大野辰教諭）

〇授業者自評

・川津教諭

現在世界の大きな課題である「食糧問題」について、生徒に多角的な視点で探究して欲しくこの教科横断授業を設定した。地理担当者として取り扱う内容は、教科書に記載されている内容を「土」を軸に並べ替えるだけであったので、化学分野の考察・授業をお願いした大野教諭への負担が大きくなってしまった点が今後の課題である。生徒は、化学と地理のつながりを感じてくれていたようなので、その点は良かったと感じている。

・大野教諭

土と作物の関係を理解するには化学、生物、地学の知識が必要だったので、既習事項の確認に加えて教科書にない知識も取捨選択しながら伝えた。確認した知識を結びつけることで今回のテーマを考察できるようにし、私自身が面白いと感じたことを追体験してもらえるように心がけた。生徒の感想を見ると、ものごとの原因を理解できたことや、考えが深まることに楽しさを感じてくれたようで、そこはよかった。

主たる教科科目	英語	担当者	永田　泰寛
横断する教科科目名担当者名		化学　　大野　辰晃 生物　　田川　裕美	
実施学級・日時	３年４組３３名（男子１５名 女子１８名）令和４年　９月２１日（水）　５時限		
内　容	テーマ　：　「バイオミメティクス」 コミュニケーション英語Ⅲのテキストでヤモリが壁を登るメカニズムが紹介されている。その内容理解を永田が行う。ヤモリが壁を登るときに利用するファンデルワールス力の説明を大野先生が行う。ヤモリの手足の粘着力は粘着テープに応用されている。生物の特化した機能を工業製品に応用することをバイオミメティクスと言うが、ヤモリ以外のバイオミメティクスの紹介を田川先生が行う。		

	学習内容・活動
導入（3分）	
講義１：英語科（１７分）	テーマ「ヤモリが壁を登るメカニズム」（永田教諭）
講義２：理科　化学（１０分）	テーマ「ファンデルワールス力」（大野教諭）
講義３：理科　生物（１０分）	テーマ「バイオミメティクス」（田川教諭）
まとめ（１０分）	

○授業者自評

・永田教諭

英語は試験範囲の復習だったので、理解しやすかったと思う。化学や生物について、難しい内容もわかりやすくクイズ形式などで教えていただき、生徒の反応も良好だった。スライドやワークシートや実物の粘着テープを準備できたこともよかったと思う。今後ワークシートを評価に活かせないか。

・大野教諭

ヤモリが壁を上る原理を紹介した。「ファンデルワールス力」を説明するときには高校で学ぶ以上の内容を盛り込んだが、生徒は概要を理解できたようであった。英文の理解をより深く理解するという目的は大いに達成できたと思われる。生徒の反応もよく、前向きに授業に参加している様子だった。

・田川教諭

今回は「バイオミメティクス」についてヤモリ以外の生物模倣製品の紹介と、これから期待されている役割について、地球環境の持続可能性を視野に、より発展的に授業を展開した。生徒はペアワークで積極的に話し合い、質問に対しても、主体的に授業に参加している様子がうかがえた。

主たる教科科目	家庭基礎	担当者	新開　三重子
横断する教科科目名担当者名		地歴公民（地理）　　水江　亘	
実施学級・日時	２年１組３９名（男子２４名 女子１５名）令和４年１２月１２日（月）　１時限 ２年６組３９名（男子１５名 女子２４名）令和４年１２月１２日（月）　５時限 ２年７組３８名（男子１５名 女子２４名）令和４年１２月１３日（火）　３時限 ２年２組４０名（男子２４名 女子１６名）令和４年１２月１４日（水）　２時限 ２年５組４０名（男子１４名 女子２６名）令和４年１２月１５日（木）　３時限 ２年３組４１名（男子１５名 女子２６名）令和４年１２月１６日（金）　５時限 ２年４組３９名（男子１４名 女子２６名）令和５年　１月１１日（水）　５時限		
内　容	テーマ　:「水」 調理実習を振り返り、体内における水の役割、調理と水について考える。 水を買って飲むようになって 40 年。おいしい水の定義から、ペットボトルの水、日本の水について考える。 雨水は地表に降り、地中、海へと流れる。日本と世界の地形の違いから水について考察する。水の違いが食文化に与えた影響についても知る		

	学習内容・活動
導入（5 分）	調理実習の振り返り（新開）
講義１：家庭科（10 分）	おいしい水とは？軟水と硬水（新開）
講義２：地歴公民科（20 分）	地形の違い（水江教諭）
講義３：家庭科（10 分）	料理と水（新開）
まとめ（5 分）	水の自給率（新開）

○授業者自評

・新開教諭

水は身近にありすぎて「おいしさ」と問われても、イメージすることは難しかった。初めのクラスで硬水だけ試飲したところ、違いを感じ取れなかった生徒が多かったので、次の授業からは軟水を飲んだ後に硬水を飲み、比較できるように変更した。すると、その飲みごたえの違いに驚く生徒が多かった。出汁、茶、米など、食文化はその土地の水があってのものという紹介をしたところ、実際に２種の水で調理し、比較して味わいたい、という感想が多かった。

・水江教諭

水の違いが発生する要因を地理Ｂで学ぶ地形、とりわけ河川の違いによって説明した。しかしながら、水の違いは、地形だけでなく地質やその採取方法や商品化の過程の違いなど様々な要因が絡んでいるので、時間的な制約もあり、河川と水の関係だけでは十分な説明とはならなかった。内容も飲料水のみならず、料理や酒造、さらにはバーチャルウォーターの話など多岐にわたったので、授業時間を２時間とって、さらには地学または化学との教科横断を考えてもよいと感じた。

６．総合的な探究の時間　「夢現∞プロジェクト」

（１）概要

SDGs の実現や Society5.0 の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、その活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成し、実践につなげる。

また、自己の在り方と社会との繋がりを考えながら、社会の持続可能な発展に関わり、豊かな人生を切り拓くための学びに向かう力、人間性の涵養を目指す。

なお、この取組については令和元年度から 4 年間にわたって継続して実施しており、令和 2 年度には、北九州市主催の高校生 SDGs 選手権大会において、プレゼンテーション部門で SDGs 大賞、ポスター部門で優秀賞及び特別賞パートナーシップ賞を受賞する実績を残している。

（２）取組内容

第 1 学年では、探究活動が本格的に始動する前の準備段階として、基礎づくりを実施する。大学や企業の講師による、SDGs の理念や思考方法に関する講演会の開催、SDGs 各ゴールについての調べ学習、探究活動に向けたスキルトレーニングを行う。

第 2 学年では、「SDGs を達成するために解決すべき課題と、私たちにできること」について、主体的・協働的に探究活動を行う。実態を学び解決策を検討するための取材活動、社会人との協議・座談会、行動計画の実践、成果発表会、活動レポートの作成、外部コンテストへの出場等に取り組む。

第 3 学年では、第 1 学年・第 2 学年との交流会を実施し、「夢現∞プロジェクト」のまとめと次学年への引継ぎを行う。

以下、「夢現∞プロジェクト」のメイン学年である第 2 学年における令和 4 年度取組について、実施内容を報告する。

（３）第 2 学年　令和 4 年度実施報告

【第 1 段階　4～5 月】

・各探究班で取り組む課題を決定し、研究計画を立てる。

◆各班取組ゴールとテーマ

ゴール番号	ゴール	班	テーマ
1	貧困をなくそう	1A	ひとり親世帯の現状と支援策
2	飢餓をゼロに	2A	Let’s know 規格外野菜！
		2B	みんなでエコろうクッキング
		2C	SNS を用いて飢餓をなくしていこう
3	すべての人に健康と福祉を	3A	全ての人に健康と福祉を ～みんなに幸せを届けたい～
		3B	ストレスに強くなろう！
4	質の高い教育をみんなに	4A	不登校を増やさない！！！
5	ジェンダー平等を実現しよう	5A	クイズで学ぼう、LGBTQ+！！
		5B	なくそう！ジェンダー差別 広げよう！ジェンダー教育
		5C	名もなき家事を広めよう

ゴール番号	ゴール	班	テーマ
6	安全な水とトイレを世界中に	6A	つなげよう下水道！！
		6B	安全な水とトイレを世界中に ～高校生の私たちに今できること～
7	エネルギーをみんなに そしてクリーンに	7A	誰でもできる小さな SDGs
8	働きがいも経済成長も	8A	あなたの気持ちでつながる国際交流の輪
		8B	～♪Go to travel♪～
10	人や国の不平等をなくそう	10A	耳の不自由な方が暮らしやすい社会へ
		10B	買い物で世界を救おう
11	住み続けられるまちづくりを	11A	Best Useful Society
12	つくる責任つかう責任	12A	まさかのマスク？！ ～つくる責任つかう責任から見た SDGs の大切さ～
		12B	身近なところからリサイクル ～チョークとペットボトル～
13	気候変動に具体的な対策を	13A	ポスターで環境マスターに！
14	海の豊かさを守ろう	14A	No 藻 re Sunscreen
		14B	それ、ほんとにゴミですか？
15	陸の豊かさも守ろう	15A	減らそう！無駄紙　使おう！裏紙
16	平和と公正をすべての人に	16A	虐待防止！頼り頼られる大切さ ～気持ちを明かす第一歩～

【第 2 段階　6～10 月】

・研究計画に沿って、調査・研究を進める。
・SDGs 探究ガイダンスの実施。
・課題解決に向けたアクションプランを設定・実行する。

◆SDGs 探究ガイダンス（6 月・10 月）

6 月・10 月に各 1 回、国公私立大学の先生やコンソーシアム構成員に協力をいただき、中間発表・座談会を行った。対面形式・オンライン形式を併用して実施。研究内容や表現に関する指導・助言を受け、研究を深める機会となった。

〈生徒の感想〉

・ネットでは出てこないような、よりリアルなことを話してもらったので探究活動を進めていく上でとても貴重な体験でした。この機会を大切にして、班の中で意見を出し合いより相手に何を伝えたいかを明確に決めていきたいと思います。
・今までアクションプランのことばかりを考えていたけど、原点に戻って SDGs のゴールが呼びかけるメッセージや、私たちがなぜその番号を選び、どう改善したいのかを再確認して今後の活動に活かそうと思います。

・自分達が何を目標にしているかの細かいところが班の中で少しずれていたので、班の中で共有していきたいと思いました。情報がまだしっかり調べられていなかったので、しっかり調べて表やグラフなどを使って発表に活かしたいです。

【第3段階　11～12月】
・選考会、成果発表会で研究の成果を発表する。

◆選考会（11月9日）
3会場に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々にご協力いただき行った。選考会上位7班は、翌月開催される成果発表会ステージ発表部門へ進出となり、外部コンテスト「SDGs QUEST みらい甲子園」への出場権を獲得した。選考会後は、各会場にてコンソーシアム構成員及び外部協力者の方より講評をいただく場を設けた。

◆成果発表会（12月14日）
前月の選考会の結果を受けて、ステージ発表部門・ポスター発表部門に分かれて発表会を実施。審査は、教員、1・2学年生徒、さらに本校コンソーシアム構成員及び外部協力者の方々にご協力いただき行った。成果発表会後は、ステージ発表部門でプレゼンを行った班と、コンソーシアム構成員及び外部協力者の方との懇談会を実施し、発表内容や表現に関する指導・助言をいただいた。
また、各部門の上位入賞班は、発表内容を本校ホームページに掲載し、校外への活動アピールにつなげた。

〈生徒の感想〉
・最後まで話し合いながら全員で改善をしていった結果、一人一人が全力を出すことができた。質疑応答なども協力して対応できた。
・ポスター発表では、見やすいポスターを作成することはできたが、アクションプランに筋が通っていなくてアンケートの質問に隙があり、「なぜああしなかったの？」「こういう質問はしましたか？」など質問された。自分たちがどういう理由でこの研究に取り組んだかを意識共有して、必要なことを話し合っていればもっと具体性のある発表ができたと思う。
・座談会では、研究の進め方に関しては社会人ならではの厳しいご指摘もあったが、着眼点やアクションプランについては概ね好評価であった。資料のまとめ方や情報の伝え方は今後の進学や就職でも活用できるスキルなので積極的に使っていきたい。

【第４段階　1～3 月】
・班レポート、個人レポートに研究の成果をまとめる。
・新２学年生徒へ引継ぎを行う。

◆新２学年生徒への引継ぎ（3 月 15 日）
　来年度の「夢現∞プロジェクト」に向けて、1・2 学年生徒間で情報伝達・共有の場を設定した。トップリーダー生徒が、「夢現∞プロジェクト」の活動内容についての発表を行い、その後、班ごとの 1・2 学年生徒間交流の中で質疑応答を行った。2 学年班は、1 学年へ引き継ぎたい研究について資料等提示しながら説明し、持続的な探究活動を目指した。

〈生徒の感想〉
・リーダーを経験して、リーダーシップを発揮する難しさを改めて知った。活動が終了しても、私自身のライフワークとして、人間の幸せである「人に愛されること」「人に褒められること」「人の役に立つこと」「人から必要とされること」を目指していきたい。
・違う考え方の人と同じことをする難しさや、スケジュール管理の大変さを感じました。将来、大学でも仕事でも人といろんなことをすると思うので、SDGs でしたように、相手のことも理解した上で、みんなで進めていけるように心がけたいです。
・SDGs の探求活動を通して仲間との協力やグループを一つにまとめるリーダーシップを身につけることができた。また、何度も人前で発表したことで自分に自信がつき、人前で話すことが苦にならなくなった。この活動で得た経験をぜひ自分の将来の夢であるマーケティング等に活かしていきたい。

（4）使用資料及び生徒成果物一覧（次頁より掲載）
1　令和４年度総合的な探究の時間計画
2　研究計画書サポートシート
3　研究計画書（下書き）
4　研究計画書（清書）
5　成果発表会冊子（一部抜粋）
6　成果発表会採点ルーブリック
7　班レポート作成上の留意点
8　班レポート作成見本
9　班レポート作成用ワークシート
10　班レポート冊子（一部抜粋）
11　個人レポート作成上の留意点
12　個人レポート作成見本
13　個人レポート作成用ワークシート

4年度　総合的な探究の時間計画

※必ず毎月の授業実施計画表で確認してください。

月	日	曜	限	1年生		日	曜	限	2年生		日	曜	限	3年生
4	13	水	7	応援練習	4	13	水	7	春休み課題共有	4	13	水	7	クラス別探究①（希望進路確認/3Csノート）
（2H）	20	水	7	進路探究①（適性検査）	（2H）	20	水	7	研究計画書作成①	（2H）	20	水	7	クラス別探究②（希望進路確認/3Csノート）
5	2	月	7	進路探究②（各クラス）	5	2	月	7	研究計画書作成②（3年生との交流）	5	2	月	7	クラス別探究③（2年生との交流）
	11	水	7	進路探究③（文理選択）		11	水	7	研究計画書作成③（締切）		11	水	7	クラス別探究④（希望進路表明）
	18	水	6	SDGs講演会（北九州市立大学）		18	水	7	SDGs講演会（北九州市立大学）		18	水	7	面談
（4H）	25	水	7	文化祭探究①	（4H）	25	水	7	文化祭探究①	（4H）	25	水	7	面談
6	1	水	7	文化祭探究②	6	1	水	7	文化祭探究②	6	1	水	7	文化祭探究
	8	水	7	進路探究④（講演会振り返り）		8	水	7	研究①		8	水	7	進路別探究①
	15	水	6	探究活動について（3年生との交流）		15	水	6	研究②		15	水	6	クラス別探究⑤（1年生との交流）
（4H）	29	水	7	ポスター作製①	（4H）	29	水	7	SDGs懇談会①（大学）	（4H）	29	水	7	進路別探究②
7	6	水	7	ポスター作製②	7	6	水	7	研究③	7	6	水	7	分野別探究①
（2H）	13	水	7	ポスターセッション	（2H）	13	水	7	研究④	（2H）	13	水	7	分野別探究②
8	24	水	6	進路探究⑤（小論文まとめ）	8	24	水	6	研究⑤	8	24	水	6	クラス別探究⑥
（1H）					（1H）					（1H）				
9	21	水	7	進路探究⑥（各クラス）	9	21	水	7	SDGs懇談会②（企業）	9	21	水	7	分野別探究③
（1H）					（1H）					（1H）				
10	5	水	7	進路探究⑦（各クラス）	10	5	水	7	研究⑥	10	5	水	7	進路別探究③
	12	水	7	同職セミ：調査・探究		12	水	7	研究⑦		12	水	7	進路別探究④
	19	水	7	同職セミ：質問づくり							19	水	7	分野別探究④
	26	水	7	同職セミ：リハーサル		26	水	7	研究⑧		26	水	7	分野別探究⑤
	28	金	2	職業セミナー		28	金	5	職業セミナー（意見交換会）					
			3											
（7H）			4		（4H）					（4H）				
11	2	水	4	創立記念講演会	11	2	水	4	創立記念講演会	11	2	水	4	創立記念講演会
			7	進路探究⑧（講演会振り返り）				7	選考会リハーサル				7	クラス別探究⑦
	9	水	5	夢現∞プロジェクト選考会		9	水	5	夢現∞プロジェクト選考会					
			6					6						
			7					7			9	水	7	進路別探究⑤（2年生選考会）
	16	水	7	進路探究⑨（各クラス）		16	水	7	ポスター作製・PPT修正①		16	水	7	クラス別探究⑧
（7H）	30	水	7	SDGs講演会（企業）	（7H）	30	水	7	ポスター作製・PPT修正②	（5H）	30	水	7	クラス別探究⑨
12	7	水	7	進路探究⑩（講演会振り返り）	12	7	水	7	成果発表会リハーサル	12	1	水	7	特別時間割
	14	水	4	夢現∞プロジェクト成果発表会		14	水	4	夢現∞プロジェクト成果発表会					
			5					5						
			6					6						
			7					7			14	水	7	特別時間割（2年生成果発表会）
（6H）	21	水	3	活動記録・希望調査	（6H）	21	水	3	レポート作成①	（3H）	21	水	3	特別時間割
1	11	水	7	課題研究の意義について	1	11	水	7	レポート作成②	1	11	水	7	特別時間割
											16	月	3	自己採点
													4	
	18	水	7	探究スタートアップ①		18	水	7	レポート作成③（締切）		18	水	7	特別時間割
（3H）	25	水	7	探究スタートアップ②	（3H）	25	水	7	クラス別探究①	（4H）				
2	1	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）	2	1	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）	2				
	8	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）		8	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）					
（3H）	15	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）	（3H）	15	水	7	理数科課題研究成果発表会（3コマ）	（0H）				
3	15	水	7	探究スタートアップ③	3	15	水	7	クラス別探究②	3				
（1H）					（1H）					（0H）				

1学期（～6月末）	10	時間	1学期（～6月末）	10	時間	1学期（～6月末）	10	時間
2学期（～11月末）	18	時間	2学期（～11月末）	15	時間	2学期（～11月末）	13	時間
3学期（～3月末）	13	時間	3学期（～3月末）	13	時間	3学期（～3月末）	7	時間
年　間	41	時間	年　間	38	時間	年　間	30	時間

「夢現∞プロジェクト研究計画書」作成サポートシート【4/13(水)配布→4/20(水)提出】

1．SDGs ゴール

ゴール(　　)番

2．班がアプローチするターゲット(169 のターゲットから 1 つ選ぶ)

3．ターゲットを達成できたかどうか判断するための指標(インディケーター)

4．ターゲットが達成されていないと感じる身近な例(福岡県/北九州市/八幡高校/個人レベル)

5．班がアプローチするターゲットの分析

班がアプローチするターゲット

※「2．班がアプローチするターゲット」で書いた目標をもう一度ここに書く。

原因の分析(仮説)

「班がアプローチするターゲット」を現在達成できていない主な課題と原因

その原因

原因【A】

その原因

原因【B】

その原因

原因【C】

その原因

原因【D】

その原因

原因【E】

その原因

原因【F】

※バックキャスティングで「班がアプローチするターゲット」を現在達成できていない主な課題と原因を考える。

班名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

組　番 名前	組　番 名前
組　番 名前	組　番 名前
組　番 名前	組　番 名前
組　番 名前	組　番 名前

6．原因に対する対策(仮説)

【原因に対する対策】　　**【この班ができること】**

原因【　】
※基本的に原因 C か F から選ぶ。

【原因に対する対策】		【この班ができること】
個人レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
学校レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
地域・北九州市レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
企業レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
国・世界レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること

【原因に対する対策】　　**【この班ができること】**

原因【　】
※基本的に原因 C か F から選ぶ。

【原因に対する対策】		【この班ができること】
個人レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
学校レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
地域・北九州市レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
企業レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること
国・世界レベル　(ある・ない・わからない)	対策 / 働きかけ	この班ができること

7．この班の目標

班がアプローチするターゲットの分析と原因に対する対策(仮説)をふまえ、この班の 1 年間の夢現∞プロジェクトの目標を書こう。

※具体的なアクションプラン(行動計画)を書けると良い

8．調査しなければわからないこと・調査しなければならないこと・実行したいこと

調査項目・実行したいこと	調査方法・実施方法
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他(　　)
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他(　　)
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他(　　)
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他(　　)
	アンケート・インタビュー・文献・ネット・その他(　　)

【　　】班　夢現∞プロジェクト 研究計画書（下書き）

1．SDGs ゴール

ゴール番号【　　】

ターゲット番号【　　】

2．班の目標

3．「班の目標」の設定理由

4．研究仮説（『作成サポートシート』の内容をもとに仮説を立てる）

①解決したい課題とその原因　＊解決したい課題と、原因【A~C】または【D~F】の内容をまとめて記入する

②目標 / アクションプラン（行動計画）　＊①解決のための目標と具体的な行動計画を記入する

③原因【 C ／ F 】の解決　＊②によって、「C」または「F」がどのように解決されるか仮説を立てる

④原因【 B ／ E 】の解決　＊②③によって、「B」または「E」がどのように解決されるか仮説を立てる

⑤原因【 A ／ D 】の解決　＊②③④によって、「A」または「D」がどのように解決されるか仮説を立てる

⑥課題の解決　＊②③④⑤によって、①がどのように解決されるか仮説を立てる

5．研究計画

○調査計画

	調査項目	調査方法	責任者	期限
①				月　日(　)
②				月　日(　)
③				月　日(　)
④				月　日(　)
⑤				月　日(　)
⑥				月　日(　)

○アクションプラン(行動計画)

	アクションプラン(行動計画)	責任者	期限
⑦			月　日(　)
⑧			月　日(　)
⑨			月　日(　)
⑩			月　日(　)
⑪			月　日(　)
⑫			月　日(　)

○スケジュール

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
春休み調査内容共有	研究計画書完成 研究計画書作成	研究開始					発表用パワーポイント完成 選考会	成果発表会	レポート作成開始	レポート提出

※項目を書き足し、大まかなスケジュールが分かるようにすること。

6．メンバー・役割分担

クラス・番号・名前	役割	備考(部活等)
組　番 名前	リーダー	
組　番 名前	副リーダー	
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		

※役割：リーダー・副リーダー以外は、各班で自由に設定可。(特定の役割を決めなくてもよい)

※備考欄には、部活動など班で活動する際のスケジュール調整に必要な情報を自由に記入すること。

【　　】班　夢現∞プロジェクト 研究計画書

1．SDGs ゴール

ゴール番号【　　】

ターゲット番号【　　】

2．班の目標

3．「班の目標」の設定理由

4．研究仮説

※文章や図、フローチャート等を使って表現すること。

5．研究計画

〇調査計画

	調査項目	調査方法	責任者	期限
①				月　日(　)
②				月　日(　)
③				月　日(　)
④				月　日(　)
⑤				月　日(　)
⑥				月　日(　)

〇アクションプラン(行動計画)

	アクションプラン(行動計画)	責任者	期限
⑦			月　日(　)
⑧			月　日(　)
⑨			月　日(　)
⑩			月　日(　)
⑪			月　日(　)
⑫			月　日(　)

〇スケジュール

4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月
春休み調査内容共有	研究計画書完成 研究計画書作成	研究開始					発表用パワーポイント完成 選考会	成果発表会	レポート作成開始	レポート提出

※項目を書き足し、大まかなスケジュールが分かるようにすること。

6．メンバー・役割分担

クラス・番号・名前	役割	備考(部活等)
組　番 名前	リーダー	
組　番 名前	副リーダー	
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		
組　番 名前		

※役割：リーダー・副リーダー以外は、各班で自由に設定可。(特定の役割を決めなくてもよい)

※備考欄には、部活動など班で活動する際のスケジュール調整に必要な情報を自由に記入すること。

令和4年度
福岡県立八幡高等学校普通科
『夢現∞プロジェクト』
成果発表会

令和4年12月14日（水）

年　　組　　番　氏名

目 次

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について
2. 本日の日程
3. 発表タイトル一覧【省略】
4. ポスター発表会場図【省略】
5. 各班資料（①ステージ発表班資料 ②ポスター発表班資料）
※①のうち一部抜粋して掲載

1. 普通科探究活動『夢現∞プロジェクト』について

今年度で 4 年目となる「夢現∞プロジェクト」は、「SDGsを達成するために解決すべき課題と、私たちにできること」 について、八高生が主体的に探究し、その課題解決に向けて取り組むプロジェクトです。

17のゴールの中からひとつを班別課題として設定し、4月から約 8 か月間にわたり探究活動に取り組んできました。まず、解決すべき課題について文献調査やインタビュー、アンケート等をもとに学びました。その後、課題解決の方策について班内で討議し、問題提起と解決策を提案し、実行してきました。

本日の成果発表会では、これまでの取組と考察、そして今後の展望について、ステージ発表、ポスター発表の形式で各班が発表します。

2. 本日の日程

12:35　開会行事
12:45　ステージ発表（7班）
　　8分以内の発表＋質疑応答
14:30　ポスター発表（18班）
　　10分（発表・質疑応答8分＋移動2分）×5ラウンド
　　投票・講評
15:35　閉会行事

～♪Go to travel♪～

福岡県立八幡高等学校　８B班

問題解決のための目標

【ターゲット8.9】
2030年までに、雇用創出、地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業を促進するための政策を立案し実施する
⇒北九州市の持続可能な観光業の促進
北九州市の観光地の認知度を上げる

研究の動機

新型コロナウイルスの影響で市外から訪れる観光客が減少していると考えたから

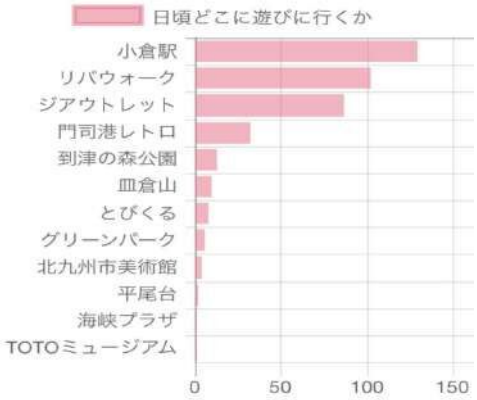
北九州市の観光業の現状

- 地元で人気でも他県には広まっていないスポットがある
- 観光パンフレット、ガイド本ではJRを使うことを前提としたものが多い

［現状から考えたこと］
地元の人にもっと北九州市の観光業を知って貰う必要がある

研究内容

- アンケート
  対象:八幡高校２年生　１７７名
  内容:日頃遊びに行く場所
- 人気スポットの傾向を調べる
- アンケート結果をもとに主にバスを使った観光プランを作成
- それぞれの観光地へ行き、実際に観光を行う
- 穴場となっている観光地を探す
- 西鉄観光バス株式会社様と観光プランについて打ち合わせをする



アンケート結果から考えたこと

小倉駅やTHE OUTLETS KITAKYUSHUなどSNSでの情報発信が進んでいる観光地に票が集まった
⇒ターゲットをSNSの発信が盛んな高校生・大学生にすることにより、より多くの人に観光地を知ってもらえると考えた

アクションプラン

持続可能な観光業を促進するために、地元の方に何度も足を運んでいただける**観光プラン**
【地元の高校生発案！魅力再発見プラン】
の発信・作成

[観光プランの作成]
①観光地の調査
小倉・門司区・八幡東区など実際に訪れて、メリット、デメリットの調査
②アンケート結果等をもとに、目的・地域別にプランの作成
※旅行会社などのパンフレットを参考にして作成
③西鉄バス北九州様に協力いただき、私達が作成した観光プランの添削・修正の依頼

★西鉄バス様に協力を依頼した理由
・北九州市内を移動しやすい
・景色をゆっくり楽しむことができる
・一人あたりの二酸化炭素排出量が少ない
→環境にも優しい
④観光プランの作成
現在も、西鉄バス北九州様と週１回、リモートで打ち合わせを重ね、専門的な知識や私達の希望も含めたプランを作成中

[観光プラン発信計画]
①作成した観光プランをQRコードにし、小倉駅バスターミナルに掲示し発信する
②実際に観光してもらい、私達のプランを拡散してもらう

今後の展望

- 西鉄バス北九州様とプランの修正を重ね、実際にQRコードを作り、小倉駅バスターミナルに貼る
- 八幡高校の生徒にQRコードを配布する

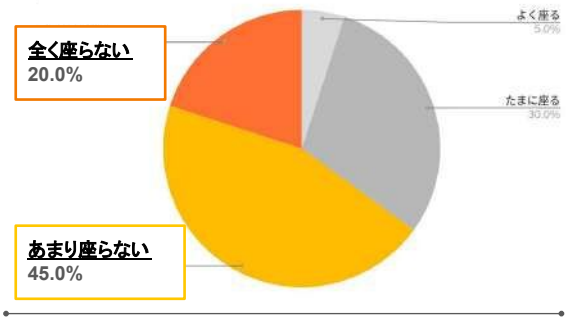
Best
Useful
Society

11.住み続けられるまちづくりを
7.誰もが安全で使いやすい公共交通機関の実現

福岡県立八幡高等学校
11A班

みなさんも見たことがあるのではないでしょうか

〈国土交通省からこんなデータが！〉



研究の動機

登下校中のバスの中で
・混雑時でも優先席が空いている
・二人席を一人で利用している のをよく見かけるから

あの席空いてるのに
誰も座らないのかな？

座席を有効的に使えてない!!

※八高生にとって、早く家に帰ることができない悲しみは大きいのです。

実はこの現状は**日本特有**のもの

海外では…優先席を譲ることは、**当たり前**という認識になっている！

目標

- **優先席に座る人を増やす**
- **二人席の有効的な使い方を広める**

考察

アクションプランを実行することでバスの車内全体を有効的に利用できることにつながる

アクションプラン

・思いやりシートの設置
・ポスターの掲示

今後の願望

公共交通機関を今よりも快適に利用できるようにし、住みやすい街を実現する

得られる効果

・優先席を有効利用するための仕組み作り
・バスマナーの再確認、徹底

参考文献

国土交通省
https://www.mlit.go.jp/monitor/R1-kadai01/30.pdf

現状

どうして優先席に座らないの？

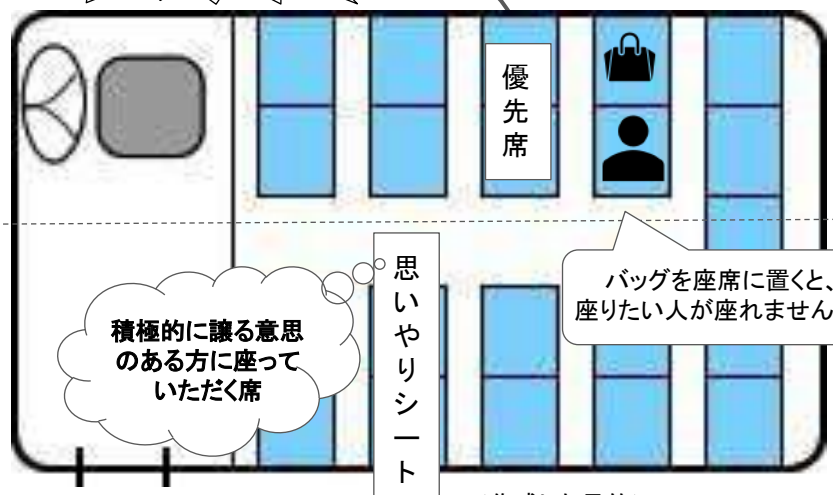
優先席が空いている！

・周りからの視線が気になる
・譲るかどうか迷う
→トラブルになる事を避けたい

アクションプラン：**思いやりシートを設置する**
ポスターを掲示する

すると…

・一度にバスに乗れる人が少なくなる
・優先席の前に人が立っていて **本当に座りたい人が思うように座れない**



バスイメージ図

あなたのその**善意**
間違っている
かもしれません

思いやりシートを設置した場合

ヘルプマーク

障害を持っている方が自分の症状を周りの人に知らせるためのもの

ヘルプマークを持っていないが、その日の体調がすぐれない若い人も**周りの目を気にせずに座ることが出来る**

143番、1番
路線に掲示予定

＜作成した目的＞

改めて車内マナーを認識してもらう

車内掲示用に私たちが作成したポスター

まさかのマスク？！　～つくる責任つかう責任から見たSDGｓの大切さ～

福岡県立八幡高等学校
12A

《 課題解決のための目標 》

プラスチックなどの製品の無駄遣いをなくし、持続可能な開発のために、情報不足の世の中に正しい情報を広める。

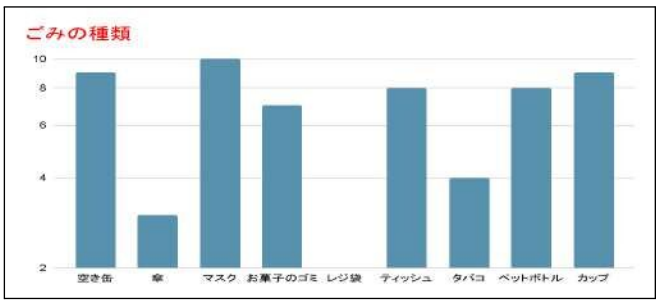
《 研究内容 》

現在、問題となっている主にポリエステル等のプラスチック原料で作られている不織布マスクがどのように環境破壊に繋がっているのかについて、インターネットやインタビューで得た情報をもとに人々に伝えていく。

《 研究の動機 》

1. コロナ禍でマスクを使う人が増え、**マスクのポイ捨て**が見られるようになり、これらのゴミは自分ごとと捉えやすく、行動しやすいと思ったから。

小倉駅でのポイ捨て調査



2. マスクは今とても身近な存在であり、どこでどのような影響を与えているのか気になったから。

①地球上の生物を傷つける
生物が本来の餌とゴミを区別できずに誤飲、誤食し死亡するというケースが増加

②海の汚染
海のゴミが多いと観光業に悪影響

《 アクションプラン》

1. 企業（キュアテックス）へのインタビュー

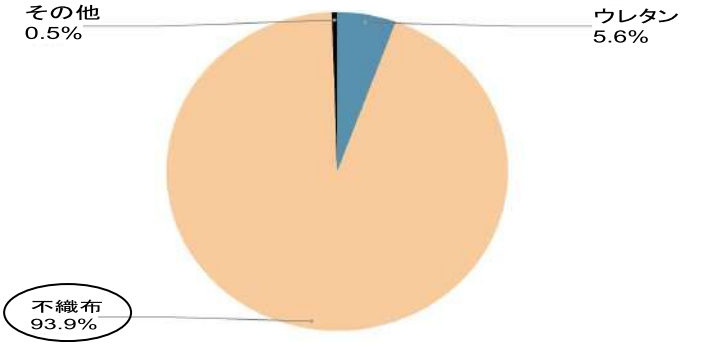
CURETEX

土から生まれて土へ還る和紙繊維100%のマスク
洗って繰り返し使え、古くなれば土に埋めておけば、生分解するので環境を汚さない！マスクの廃棄量削減！！

2. インスタグラムでの情報発信
正しい情報を広めるためにインタビューで得た情報などを発信中

3. 宮若西小学校での出前授業
マスクの大量生産と、地球環境の関わりについて知ってもらうため。

どのような材質のマスクを使用しているか



八幡高校2年生へのアンケート調査

小学生

プラスチックが海を汚している
マスクが大量に捨てられている
など身近な環境問題を知らない

先生方

世界規模の情報を子供たちに考えさせることが難しいと感じる

《 今後の展望 》

授業でも取り扱えるような**絵本**を作成し、誰でも読めるように、小学校の図書館やそれぞれの教室に設置する。

～絵本の内容～
マスクが及ぼす環境破壊について八高博士が子どもたちに伝え、環境改善のために私達ができることを実践し、街がきれいになっていく物語

参考文献
https://curetex.jp/mask/　キュアッテックス　マスク
https://ecothicalmask.com/products/ecothical-mask?variant=41782019850394　エコシカルマスク

それ、ほんとにゴミですか？

福岡県立八幡高等学校　夢現∞プロジェクト14B班

ゴール・ターゲットと目標

ゴール14　「海の豊かさを守ろう」

ターゲット14.1
　２０２５年までに、海洋ごみや富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する。

課題解決のための目標

『モノを「捨てる」という概念を変える』

研究の動機

　近年では、様々な製品にプラスチックが使われている反面、メディア等で海洋プラスチックごみ問題が顕著となっている。そこで、私たちなりに海岸に漂着するプラスチックを減らす方法はないのかと思い、探究することにした。

研究

❶藍島調査

８月６日（土）、小倉北区藍島にて実施

・海洋の現状調査

【着眼点】①種類　②出所　③漂流・漂着量

①種類→プラスチック、漁具、ガラスなど

②出所→藍島…韓国に近い

ハングル文字やその他言語で書かれたボトルなども漂着

③漂流・漂着量→プラスチックが半数以上を占めていた

・アースウォッチ「環境DNAを用いた魚類調査」

【環境DNAとは】
　海、川、湖などの水、土壌、大気といった環境の中に存在する生物由来のDNA

【方法】
　バケツで汲み取った海水をシリンジを用いて採取
　カートリッジに海水をろ過し保存液を加えて発送

（→結果は１２月中旬ごろ判明する予定）

❷インタビューの実施

２つの企業にインタビューを実施

①テラサイクル様→メールにて
　現在……２１か国でリサイクルプログラムを展開
　日本……２０１４年より国内での事業を開始
　回収量…昨年１年間で約２億個の容器をリサイクル

②パイロット様→オンライン（zoom）にて

【テラサイクル回収プログラムに参加された経緯】
　２０２０年より社内で回収事業を開始
　現在は全国の文具店などで回収プログラムを展開中

文房具は大半がごみに

芯を替えられない使い切りの文房具も…

☞使用済み文房具のリサイクル率を高めよう！

一方で

再生材は購入金額が高い

現在の円安による物価高の加速

↓

リサイクル率が高くなるほど人件費がかさみ、販売価格↗
→自社で回収してテラサイクルさんにご協力していただく

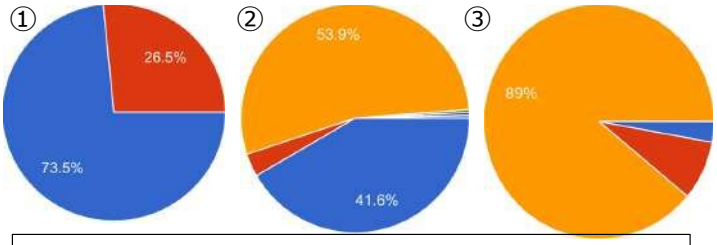
❸アンケートの実施

八幡高校全校生徒・先生方を対象にリサイクルに関するアンケートを実施

１０月１４日（金）～１０月２１日（金）
Googleフォームにて実施

【調査項目】

①普段リサイクルをこころがけていますか？
　→はい：73.5%　いいえ：26.5%
②使用済みの文房具はどのように処分していますか？
　→詰め替える：53.9%　そのまま捨てる：41.6%
③『テラサイクル』を知っていますか？
　→知っている：7%　名前だけ：4%　知らない：89%



高校生の間ではリサイクルへの興味・関心が低いのではないか？

アクションプラン

・回収ボックスの設置
　テラサイクルの使用済み文房具回収プログラムに参加し、校内にて回収の取り組みを実施

設置場所：校内２階ロータリー、１階昇降口
期間：１０月２４日（月）～（継続中）

・回収プログラムの周知
校内に回収プログラムのご協力のお願いとして、ポスターを掲示

考察・今後の展望

まずはこのテラサイクルや回収プログラムなどを知ってもらい、できたら市区町村や地元の企業などと連携して回収プログラムを拡大していきたい。

参考文献

https://www.terracycle.com/ja-JP https://www.pilot.co.jp/
https://anemone.bio/
https://www.pilot.co.jp/promotion/begreen/

採点者（ 生徒 ・ 来賓 ・ 教員 ）　　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

福岡県立八幡高校『夢現∞プロジェクト』成果発表会　採点表（ステージ発表用）

評価項目 得点	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現
５点	課題設定とその理由が明確であり、当事者意識をもった上で解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、目的に応じた手段を選択して収集・蓄積し、根拠のあるデータとして提示している。	得られた情報を正確に分析し、課題解決に有効なアクションプランを提示した上で、その考察と今後の展望について述べている。	適切な図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を論理的に説明している。質問の内容を理解し、適切に受け答えしている。
４点	課題設定とその理由が明確であり、解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を、目的に応じた手段を選択して収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を分析し、アクションプランを提示した上で、その考察と今後の展望について述べている。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を論理的に説明している。質問の内容を理解し、受け答えしている。
３点	課題設定が明確であり、解決に向けて仮説を立て、研究を進めている。	課題解決に必要な情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	得られた情報を分析し、アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して受け答えしている。
２点	課題設定が明確であり、解決に向けて研究を進めている。	情報を収集・蓄積し、データとして提示している。	アクションプランを提示している。	図表等を用いてスライドを作成し、研究内容を説明している。質問に対して受け答えしようと努力している。
八高 オクタゴン	② 課題発見力 ④ 論理的思考力 ⑧ 自己肯定力	① 情報収集力 ⑧ 自己肯定力	④ 論理的思考力 ⑥ 実行力 ⑧ 自己肯定力	⑤ 連携力 ⑦ 表現・発信力 ⑧ 自己肯定力

☆注意事項⇒　①各班で可能な限り得点に差をつけてください。　②各項目は 0.5 刻みで採点しても構いませんが、合計得点は整数で記入してください。

発表順	発表班・タイトル	① 課題の設定	② 情報の収集・蓄積	③ 整理・分析・まとめ	④ 表現	合計得点
1	８Ａ　あなたの気持ちでつながる国際交流の輪	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
2	３Ａ　すべての人に健康と福祉を ～みんなに幸せを届けたい～	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
3	８Ｂ　♪～go to travel～♪	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
4	１２Ａ　まさかの”マスク”！？ ～つくる責任つかう責任から見た SDGs の大切さ～	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
5	１４Ｂ　それ、ほんとにゴミですか？	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
6	１６Ａ　虐待防止！頼り頼られる大切さ ～気持ちを明かす第一歩～	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０
7	１１Ａ　Best Useful Society	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	５　４　３　２	／２０

２　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト班レポート』作成上の留意点【提出期限：1/18（水）】

1.『夢現∞プロジェクト班レポート』作成の目的

〇探究活動の実績をレポート形式で残す

▸自分たちの実績を形として残し、校内外に公表する。また、後輩に対しての先行研究の見本となる。

〇社会課題に対する自分たちの考えを分かりやすくまとめるトレーニングを行う

▸大学入学後のレポート作成を視野に入れ、分かりやすく説得力のある書き方について知り、考え、文書作成を行う。

2.『夢現∞プロジェクト班レポート』作成のポイント

〇調べたことについてまとめると同時に、それら対しての考察を加える

▸調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。自分たちがどういう課題意識を持って探究活動に取り組んだか、またその結果を受けて今後残された課題についてどのように考えるか、をレポートに含めること。

〇課題やその解決につながる情報をまとめる

▸集めた情報は、レポートの最後に参考文献としてまとめること。

3.『夢現∞プロジェクト班レポート』の構成

▸文体は「～である」調で統一する。　▸レポートの章立ては統一する。

研究テーマ	成果発表会で使用した研究テーマ（発表タイトル）を記入する。
1.はじめに	現状に対する課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を書き、読者を本論に誘導する。
2.研究方法	課題の現状について学び、その解決に向けての方策を探るために行った調査・研究等を記述する。 <書き方例> （1）文献調査：「平成 28 年度食料農業農村白書」（農林水産省）で・・・に関する調査を行う。 （2）アンケート調査：〇の・・に対する意識を調査するため、□を対象にアンケートを実施する。 （3）インタビュー調査：・・・について調査をするため、〇へインタビューを実施する。　など
3.結果・考察	①　3.で挙げた調査・研究等の結果を記述する。 作成した発表資料や、調査内容のまとめを参照するとよい。図・グラフなどを挿入してもよい。 <書き方例> 「『平成 28 年度〇〇白書』（農林水産省）によれば、農業従事者は図1のように減少している。」 「アンケート調査の結果・・・ということがわかった。」「インタビューの結果・・・ということがわかった。」 「この問題に対して〇〇市では・・・のような取組をしている。」
	②　①の結果をどう捉え、どのような解決策（アクションプラン）を導き出したのかを記述する。 ⇒なぜその解決策（アクションプラン）が有効だと考えるのか、根拠を示し論理的に述べる。 <書き方例> 「以上のことから、…ということがわかる。よって、私たちは…と考え、…という解決策を提案する。」
	③　解決策（アクションプラン）実行後の結果（成果）について記述する。
4.今後の課題	調査・研究および提案・実行した解決策（アクションプラン）について、残された課題を記述する。 次年度の研究者が追研究をする際に参考となる事項にふれるとよい。 <書き方例>「…するためには、さらに…する必要がある。」 「今回の研究では…することができなかった。今後は…を行っていきたい。」
5.感想	探究活動を通して、どのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかを記述する。 困難を克服した経験など、具体的なエピソードを交えて記述するとよい。
6.新２年生に 引き継ぎたい研究	新 2 年生に引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合はここに記述する。 （特にない場合は記入不要）
参考文献	調査・研究の際に使用した文献やウェブサイト等のリストを作成する。 ※書籍・論文等の場合⇒①著者名・媒体名　②タイトル　③発行年（西暦） ※ウェブ上の公開データの場合⇒①著者名・媒体名　②タイトル　③発行年（西暦）　④URL

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート（←12pt.・左寄せ）

班レポート作成見本

（一行空ける）

研究テーマ（←14pt.・太字・センタリング）

（一行空ける）

〇〇班　〇〇〇〇・△△△△・□□□□…（班員全員の氏名を入力）（←11pt.・右寄せ）

（一行空ける）

1　はじめに（←12pt.・太字）

※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。　Google Classroom → ドキュメント → 空白

※Ａ４用紙２枚程度にまとめる。

※書式設定は「空白」の初期設定値を利用する。（フォント：Arial／フォントサイズ：11pt.／余白：上下左右 2.54）

※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の本文フォントサイズは 11（初期設定値）で入力する。

※句読点は「、」「。」で統一する。

※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。

※段落わけをする。段落が変わるときは１マス下げる。

2　研究方法

3　結果・考察

4　今後の課題

5　感想

6　新２年生に引き継ぎたい研究

※この項目については、引き継いでほしい調査・研究やアクションプランがある場合のみ記入する。

＜参考文献＞（←11pt.・太字）

※参考文献のフォントサイズは９pt.で入力する。

２　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト班レポート』作成用ワークシート【提出期限：1/18(水)】

班員氏名		
研究テーマ		
1	はじめに	
2	研究方法	
3	結果 ・ 考察	

3	結果 ・ 考察	
4	今後の 課題	
5	感想	
6	新２年生に引き 継ぎたい研究 （あれば記入）	
参考文献		

令和４年度
福岡県立八幡高等学校普通科
『夢現∞プロジェクト』
第 76 期　班レポート

令和５年３月 15 日　発行

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート

すべての人に健康と福祉を～みんなに幸せを届けたい～

３A班

１　はじめに

私たちは、ゴール番号3『すべての人に健康と福祉を』のターゲット番号3.4『2030年までに、非感染性疾患（NCD）による若年死亡率を、予防や治療を通じて3分の1減少させ、精神保健および福祉を促進する』について1年間探究してきた。

このゴール・ターゲットを選んだ理由は、主に２つある。１つ目は、近年、日本の若者の自殺率が高く、その背景には精神疾患が存在していることが多い、というデータ（出典は主に厚生労働省、警察庁の統計より）を見て興味を持ったからである。２つ目は、過去に悩みを抱える同級生と関わったことがある班員が多く、その中で「相談してもスルーされる」と言っていた同級生の言葉が目立ったことから、「八幡高校にも『悩みを相談してもスルーする・される人』が気がつかないだけで実は多いのではないか」と考え、詳しく調べてみたいと思ったからである。

２　研究方法

１つ目は、アンケート調査である。主に『心が不調な友人に対する接し方』『生徒自身の健康状態』について調査するため、１年生と２年生を対象にアンケートを実施した。

２つ目は、インタビュー調査である。『人と関わる上で大切なこと』『スクールカウンセラーとの繋がり方』などについて調査するため、八幡高校のスクールカウンセラーであるシャルマ直美先生と養護教諭の小野原先生へインタビューを実施した。

３　結果・考察

アンケートに回答した生徒は、1、2年生全体で3分の1の生徒しかいなかった。インタビューでは、人と関わる上で大切なことは何かということについて多く学ぶことができた。

アンケートの結果から、「アンケートに答えていない3分の2の人は、ターゲット番号3.4のような問題に興味がないのではないか」、また「このような問題に興味・関心がない大人も、子どもと同じように多くいるのではないか」と予想した。他にも、アンケートから、悩んでいる友人への対処の仕方を知らない生徒や、スクールカウンセラーについてあまり知らない生徒が多いことが読み取れた。インタビューでは、『日頃からお互いの話をよく聞くこと』『悩んでいる人の気持ちをわかろうとすること』『否定をしないこと』この3点が、人と関わる上で特に重要であるということを学んだ。

以上を踏まえて、私たちは２つのアクションプランを考案した。どのアクションプランも、『無関心な人を減らすこと』『子どもや大人が、悩みを抱えている人の現状を知り、知識を身につけ、対処法を知ること』を狙いとしている。

１つ目は、ポスターの作成・掲示である。子ども向けに4種類、大人向けに2種類のポスターを作成した。それぞれ、メッセージ性の異なるものとなっている。ポスターを作成した理由は、ポスターを校内や校外の目の付くところに掲示することで、多くの人が問題に興味を持つことができると考えたからである。2023年1月18日現在、八幡高校の校内と北九州市立ユースステーションに掲示している。

２つ目は、リーフレットの作成・配布である。子ども向け、大人向けに計2種類の白黒リーフレットを作成し、本校2年生と、その保護者に配布した。その後、カラーリーフレット『メンタルケアリーフレット』を外部の方からの支援を受けながら作成し、本校1、2年

生と先生方に配布した。白黒リーフレットは、アンケート結果やインタビュー内容についてより詳しくまとめたものであり、カラーリーフレットは、白黒リーフレットの内容をさらに発展させ、相談先や心と身体のSOSサイン、よくある誤解についてまとめたものとなっている。白黒リーフレット・カラーリーフレットを作成した理由は、リーフレットを通してどんな人でもこころの病気についての知識を身に付けることができるからである。また、身につけた知識をもとに、問題に対する認識を改めたり、今後どのように人と関わっていくかを考えたりすることができるからである。2023年1月18日現在、カラーリーフレットについては、八幡高校の保健室や北九州市立ユースステーションにも置いていただいた他、スクールカウンセラーのシャルマ直美先生を通じて、他校や福岡県精神保健福祉センター、北九州市教育委員会への紹介・寄付をさせていただいた。

2023年１月、八幡高校の１、２年生を対象に『アクションプラン実行後の環境の変化』と『カラーリーフレットを読んだ感想』についてのアンケートを配布した。「自分の心と身体に向き合うことができた」「友人への接し方を見直すきっかけになった」「こころの病気について、自分が誤解していたことに気がついた」等の回答をたくさん頂いた。また、八幡高校の先生方を対象に『カラーリーフレットを読んだ感想』についてのアンケートを配布したが、生徒と同じように「とても参考になった」等の回答を多く頂いた。外部の方々へ向けたアンケートは実施できていないが、外部からも感想を是非頂きたいと思っている。

今後も、ポスターやリーフレットを普及させるために、外部の方のご協力を得ながら引き続き頑張りたい。

４　今後の課題

メンタルケアについて無関心な人を減らすためには、さらにSNSなどのツールを活用して、より多くの人にメンタルケアについて認識してもらう必要がある。今回の研究では、メンタルケアが必要な人に向けてのアクションを取ることができなかった。今後は、SNS（LINE、Instagram）等で相談できる場を設けること、私たち自身が、まず悩んでいる人の話を聞くなどを行っていきたい。また、無関心な人は「自分が無関心であること」に気づいていない人が多い可能性があることから、「こころの病気の問題に自分が無関心であるかどうか」を調べるためのチェックリストの作成を行う必要がある。他にも、企業の方から「知る」ことをアクションプランとしてポスターは簡単すぎるという意見を頂いたため、もう一歩踏み込んだ行動をとりたい。

５　感想

選考会までの活動（主に現状把握のためのアンケート、スクールカウンセラーの方へのインタビュー）では、インターネットや文献からでは得ることができない貴重な意見を頂くことができた。また、外部の方にお声がけいただき作成したカラーリーフレットは、私たち高校生の力だけではとても作成できない完成度の高さだった。お声をかけてくださった外部の方、その他作成に関わってくださった多くの方々に、とても感謝している。大学の先生方との交流会などでは、スライドの魅せ方など、自分たちの視野が広がるようなアドバイスをたくさん頂いた。頂いたアドバイスは、どれも夢現∞プロジェクトの活動以外でも活かせるものばかりだった。これらを私たちの一生の財産とし、大学生活で活かしていきたい。

班の目標である「身近な人から1人でも多くの人が健康に生きていくことができる環境を作る」を達成出来るように、今までにいただいた多くのアドバイスを参考にしながら、今後も活動をしていきたい。

６　新２年生に引き継ぎたい研究

多くの人が相談しやすい環境を作っていくためには、人から言われて傷つくような言葉や高校生特有の悩みの種類などについても知る必要がある。そのために、周囲の人にインタ

ビューをしてみたり、実際に自分たちが悩んでいる人の話を聞いてみたりすること、また、「こころの病気の問題に自分が無関心であるかどうか」を調べるためのチェックリストを作り、その結果をもとにポスター以外のアクションプランを考案することを引き継ぎたい。
　新しい調査やアクションプランにより『身近な人から一人でも多くの人が健康に生きていくことができる環境作り』を進めてほしい。

＜参考文献＞

ウェブ上の公開データ（①著者名・媒体名　②タイトル　③発行年（西暦）　④URL）
①警察庁　②警察庁自殺統計原票データ　③2018年
　④https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H26/H26_jisatunojoukyou_03.pdf
①警察庁　②平成３０年中における自殺の状況　③2018年
　④https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/H30/H30_jisatunojoukyou.pdf
①厚生労働省　②患者調査　③2017年　④https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/17/dl/01.pdf
①厚生労働省　②自殺対策白書　③2019年
④https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/jisatsuhakusyo2018.html
①厚生労働省　自殺対策推進室　②令和２年中における自殺の状況　③2021年
　④https://www.mhlw.go.jp/content/R2kakutei-01.pdf
①WHO　②Mortality Database　③2010年
　④https://www.who.int/data/data-collection-tools/who-mortality-database
①東洋経済オンライン
　②40年ぶりの「精神疾患教育」高校からでは遅い訳　実は精神疾患の発症ピークは「10代半ば以前」
　③2021年　④https://toyokeizai.net/articles/-/428955
①読売新聞オンライン　②コロナで日本人の「うつ」倍増、米も3.6倍…若い世代や失業者ら深刻化　③2021年
　④www.yomiuri.co.jp/medical/20210619-OYT1T50169/amp/%3Fusqp%3Dmq331AQIKAGwASCAAgM%253D
①LITALICO発達ナビ　発達障害のキホン
　②自傷行為とは？痛くても行う理由や精神障害との関係、具体的な止め方、周囲の適切な対応を解説します
　③2017年　④https://h-navi.jp/column/article/35026417
①厚生労働省　②こころの健康相談統一ダイヤル　③2022年（随時更新）
　④https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/jisatsu/kokoro_dial.html
①厚生労働省　②知ることからはじめよう　みんなのメンタルヘルス総合サイト　こころの病気を知る
　③2022年　④https://www.mhlw.go.jp/kokoro/know/index.html
①厚生労働省　②こころもメンテしよう～若者を支えるメンタルヘルスサイト～　③2022年
　④https://www.mhlw.go.jp/kokoro/youth/stress/kokoro/kokoro_03.html
①北九州市　②北九州市いのちとこころの情報サイト　北九州市自殺予防こころの相談電話
　③2022年（随時更新）　④http://www.ktq-kokoro.jp

書籍（①著者名・媒体名　②タイトル　③発行年（西暦））
①坂田三允　②精神看護エクスペール15　思春期・青年期の精神看護　③2005年

第2学年 夢現∞プロジェクト班レポート

あなたの気持ちでつながる国際交流の輪

8A班

１．はじめに

私たちは、ターゲット８.８「移住労働者、特に女性の移住労働者や不安定な雇用状態にある労働者など、全ての労働者の権利を保護し、安心・安全な労働環境を促進する」の中の「移住労働者」に着目し、外国人労働者の方々が安全、安心な環境で働ける社会をつくるために探究活動を行っている。

日本で働く外国人の方々は、低賃金、長時間労働、差別などの多くの問題を抱えているが、それらを周囲の人たちに相談できていないという現状がある。私たちは、その原因は、地域の方とコミュニケーションを取れていないことではないかと考えた。この問題を解決するために、外国人と日本人が交流できる場を作り、互いの文化をを認め合えるようにすること、また、外国人の方々が周囲の人へ困っていることを気軽に相談することができる環境をつくることを目標とした。

２．研究方法

研究を進めるにあたって、以下の方々にインタビュー調査を行った。

（1）JICA九州：外国人労働者の雇用状況を調べるため
（2）ALT レスリー先生：日本で働く外国人の方から話を聞くため
（3）英会話教室(Oxford School Of English)：日本で働く外国人の方から話を聞くため
（4）専門学校大原自動車工科大学校：日本に住む外国人の方々から話を聞くため
（5）（株）今村工務店：外国人を雇う方々の話を聞くため
（6）Leverages Global Support：外国人をサポートする方々から話を聞くため
（7）北九州国際交流協会：外国人をサポートする方々から話を聞くため

３．結果・考察

インタビューの結果、外国人と日本人はお互いに、コミュニケーションをとることへの緊張や不安を抱えていることが分かった。また、インタビューの中で、「やさしい日本語」が外国人とコミュニケーションをとるうえで有効であるということを知った。

これらの結果から、外国人の方々の抱える問題が悪化する原因は「日本人と外国人の距離」であり、日本人と外国人が関係を深める必要があると分かった。そして、日本人と外国人が関係を深めるには、コミュニケーションが重要であると考えた。

しかし、インタビュー結果にあったように、外国人、日本人は、それぞれ話すことへの不安を感じており、それがコミュニケーションをとる際の壁となっている。この壁をなくすには、外国人と日本人が直接交流をしたり、問題の現状とその解決策やコミュニケーションをとるコツなどを知ったりする必要があると考えた。

これを踏まえて私たちは２つのアクションプランを行った。国際交流イベント「八高国際交流ツアー」の開催と、啓発ポスターの制作である。

①「八高国際交流ツアー」

このイベントは、外国人と日本人が交流する機会を設けることを目的として開催した。インタビューに協力していただいた専門学校大原自動車工科大学校様と共同で行い、当日は、八高生17人、留学生20人が参加した。

イベントでは、専門学校から八幡高校までのスタンプラリーと、八幡高校でのゲームを行った。これらの企画では、留学生と八高生が、お互い一生懸命伝えようとしたり、理解しようとしたりする姿が印象的だった。

イベント終了後に参加者を対象にアンケートを行った。まず、「イベントの前後で外国人に対する印象の変化の有無について、変化があった」と答えた人は77.4%だった。次に、参加者の意見として「外国人と話すことは難しいと思っていたけど、ジェスチャーを使えば気持ちを理解し合うことができると感じた」や「言葉が通じなくても、表情や動きを使って挑戦することが大切だということを学んだ」といったものがあった。

これらの結果から、改めて、コミュニケーションの重要さを感じると同時に、あきらめずにジェスチャー等を用いて伝えようとしたり、理解しようとしたりすることが大切だということを学んだ。

②啓発ポスター

多くの人に問題の現状やその解決策について知ってもらうため、啓発ポスターを制作した。ポスターには、外国人の方々が抱える悩みや外国人の方々とコミュニケーションをとるコツをまとめ、八幡高校や活動に協力していただいた専門学校に掲示した。

ポスターの掲示後に八幡高校の1年生を対象に行ったアンケートでは「ポスターの内容について理解できたか」という質問に対し、100%の人が「理解できた」と答えたが、「やさしい日本語」については詳しく知っている人が回答者62人のうち1人という結果になった。

この結果から、ポスターを見た多くの人に外国人とコミュニケーションをとるコツを知ってもらうことができたが、未だ「やさしい日本語」について詳しく知っている人は少なく、広めていく必要があると言える。

４．今後の課題

イベントでの直接の交流や、ポスターによる啓発により、多くの人に問題やその解決策について知ってもらうことができた。しかし、これまでの活動は八幡高校生を対象としたものが多く、八幡高校以外の方々にはあまり知られていないのが現状である。よって、外国人の方々が抱える問題を解決するためには、より多くの人にその現状や解決策を知ってもらう必要がある。そのため、今後はSNSを用いたり、ポスターを駅や公共の施設に掲示したりして、多くの人に問題について知ってもらいたいと考える。

また「やさしい日本語」については、ポスター掲示後のアンケート結果にもあったように、未だ認知度が低い状況である。「やさしい日本語」は、外国人の方々が抱える問題を解決するためにとても重要な手段であるため、啓発活動と同様に、SNS等を用いて多くの人に知ってもらう必要がある。

５．感想

外国人の方々が抱える問題を調べ、実際に外国人の方々と交流して、私たち自身も驚くことや、印象がかわることがあり、とても楽しかった。私たちが外国人の方々と交流を行ったところ、外国人の方々は積極的に話しかけてくださって、話しやすい印象になった。また、イベントに参加した方々の笑顔や、楽しかったという声を聞いて、やりがいを感じ、このような交流の場が増えると良いと思った。この活動では、難しいこともあったが、協力して同じ課題に向かって探究することの重要さを学ぶことができた。

＜参考文献＞

ツナグ働き方研究所外国人雇用状況まとめ 2022年1月
http://tsuna-ken.com/cms/wp-content/uploads/2022/04/89fb88bfda49ee39677075ac5aee2fa5-1.pdf

厚生労働省 「外国人雇用状況」の届出状況 2022年10月
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_23495.html

第２学年　夢現∞プロジェクト班レポート

減らそう！無駄紙、使おう！裏紙！

15A班

１　はじめに

私たち15A班はSDGsゴール番号15「陸の豊かさも守ろう」達成に向け、研究に取り組んだ。その中でもターゲット15.1「2020年までに、国際協定の下での義務に則って、森林湿地、山地及び乾燥地 をはじめとする陸域生態系と内陸淡水生態系及びそれらのサービスの保全、回復及び持続可能な利用を確保する。」に焦点を当てた。私たちがこのターゲットについて研究することを決めた理由は２つある。１つ目の理由は、「2020年までに」と掲げているターゲットであるにもかかわらず、未だに改善されていないと感じるからである。２つ目の理由は「2020年までに」と掲げているターゲットはあるが「持続可能な利用」という言葉が私たちの目標にあっていたからである。これらの理由から”紙”に着目してアクションプランを計画した。

２　研究方法

・生徒の意見を反映したアクションプランを作成するために、八幡高校の2年生を対象としたデジタル化、裏紙の使用について２つのアンケートを実施した。
・アンケート内容だけでは知ることができない個人の詳しい意見を聞くため、裏紙の設置後に使用した人には感想を、使用していない人からはその理由をインタビューした。

３　結果・考察

デジタル化のアンケート結果から、予想していたよりも生徒がデジタル化に賛成ではないことがわかった。その理由としては、学校で見ることができないことや勉強中にスマートフォンを触るきっかけになってしまうなどの意見があがった。しかし、最近では一人一台パソコンが配布されており、学校で見ることができるようになったので、今後はよりデジタル化が進むものと思われる。

また、裏紙の使用についてのアンケート結果からは、普段紙に書いて勉強しているにも関わらず、裏紙を使用している人はかなり少数であるのがわかった。裏紙のほかに使用しているものとして、ノートやルーズリーフなどがあげられた。

そこで、裏紙を各教室と自習室に設置するのと同時に、よりたくさんの人に裏紙を使用してもらいたいと考え、裏紙の設置についてポスターを作成し、校内の複数個所に掲示した。(右の写真)また、裏紙はアンケート結果より、メモやちょっとした計算に使用している人が多かったため、小さめのA5サイズに加工して設置した。

裏紙を使用した人からは、「裏紙でも問題なく使えた」「気軽に使えて良かった」といった肯定的な意見があった一方で、使用していない人からは、「線が無くて書きにくそう」「ケチだと思われそう」などの意見が寄せられた。

このことから、裏紙を使用していない人にも使用してもらうことによって、裏紙でも問題なく使用できることを感じてもらい、それでも問題がある場合は、それについての解決策を考えることとした。また、使用した裏紙のリサイクル方法の質問も多く寄せられたため、それについても考える必要があると感じた。

４　今後の課題

まだまだ、紙の使用の問題点や大量消費について知識を持っていない人や理解していない人が多い。身近な問題から一人ひとりが意識して取り組むことで、はじめてこの大きな問題の解決につながると考える。そのため、まずは八幡高校の中で裏紙を積極的に活用することによって、無駄紙を減らしていくことから始め、更に、この意識を世界中にもっと広めていく必要がある。

５　感想

私達はゴール目標15「陸の豊かさも守ろう」に向けて、様々なアクションを起こしてきた。その中で学んだことは1つの問題を様々な角度から見て、それを解決するためには何が必要かを1つだけではなく、多くの案を出すことの重要性である。アンケートを実施した際に自分達の想定と違う結果になってしまい研究が行き詰まったこともあったが、うまく方向修正することができた。

この研究活動を通して私達は物事を多角的に見る力と柔軟な対応力を身につけることができたと思う。

紙を大量に使うことが常識となっているが、それが自分たちの首をも締めていることに気付かされた。また、自分を含め、自分が思った以上に周りの人は、紙のロスに対して関心がある人が少ないなと感じた。まずは自分が理解し、広めていくことが大切だと感じた。

６　新２年生に引き継ぎたい研究

(1)設置した裏紙の補充

各教室と自習室に設置した裏紙（A5サイズに加工したもの、サイズ変更可）の補充を行う。また、必要であれば、図書館や学習室にも設置する。

できれば、代々ゴール15の班に引き継いでもらいたい。

(2)デジタル化の推進

一人一台Chromebookが昨年配布されたので、私達があまりできなかったデジタル化の推進についても具体的に取り組む。

＜参考文献＞

地球温暖化白書
https://www.glwwp.com
株式会社市瀬
https://www.ichise.co.jp
あんしんペーパー
http://www.humeco.m.u-tokyo.ac.jp
製紙産業の現状｜世界の中の日本
https://www.jpa.gr.jp
紙、パルプグループの輸入
https://jtrade.ecodb.net
日本に来ている木材はどこから？
http://www.fukuokabank.co.jp/fuku/kaigai/asia/asia200709/dalian.pdf

２　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成上の留意点【提出期限：1/25(水)】

1.『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成の目的

この個人レポートは、あなたが『夢現∞プロジェクト』を通じて取り組んできた社会課題（＝SDGs）への関心と、これまでの活動を通じて得た知識や経験、そして伸ばしてきた力について外部にアピールすることを目的として、あなた自身の言葉でまとめるものです。

個人レポートの様式は、九州工業大学・大分大学・関西学院大学等の総合型選抜提出書類をもとに作成しており、来年度の総合型選抜や学校推薦型選抜等におけるあなたの書類作成に活用できるようになっています。また、このレポートは、来年度の担任の先生方が調査書および推薦書を作成する際の参考書類となります。

『3年生0学期に向けて』の決意表明文において、現時点での志望校を挙げていることと思います。可能な限り志望校での学びと関連付けながら、365日後の自分自身のために、心して個人レポート作成に取り組んでください。

2.『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成のポイント

〇調べたことについてまとめると同時に、それらに対しての考察を加える

▸調査・研究内容や結果について列挙するのみでは不十分である。自分がどういう問題意識を持ってその探究活動に取り組み、行動し、結果を受けて今後の課題についてさらにどのように考えるかをレポートに含めること。

〇探究活動における自身の役割とその活動内容をまとめる

▸自分が果たした役割や活動内容、そこから得た知識や力などについて、具体的なエピソードを含めて記述する。

3.『夢現∞プロジェクト個人レポート』の構成

▸文体は「～である」調で統一する。　▸レポートの章立ては統一する。

1.探究活動のテーマ	成果発表会で使用した研究テーマ（発表タイトル）を記入する。
2.テーマ設定の理由 （テーマ設定に至った背景）	現状の課題意識と、この研究テーマを選ぶに至った経緯について記述する。 「どのような課題に」「なぜ取り組むのか」等を記述する。
3.探究活動の成果に関する概要	『夢現∞プロジェクト』での取組について、以下の項目に分けて記述する。 （1）調査・研究 文献調査・アンケート調査・インタビュー調査など、アクションプランを設定するためにどのような調査・研究を行ったか （2）解決策の提案・実行 どのような目的・方法でアクションプランを計画・実行したか （3）結果・考察 アクションプランの結果（成果）とそこから導き出された考察と今後の展望
4.探究活動における個人の成果	探究活動の各段階におけるあなたの役割と活動内容、またそれらを通じてどのような知識を身につけ、どのような力を伸ばすことができたかについて、具体的に記述する。 （1）調査・研究 （2）解決策の提案・実行 （3）結果・考察（選考会・成果発表会・レポート作成）
5.探究活動を活かした今後の目標や将来の夢	探究活動を活かした今後の目標や将来の夢について、現在の第一志望校での学びと関連付けて記述する。

第２学年　夢現∞プロジェクト個人レポート（←12pt.・左寄せ）

個人レポート作成見本

（一行空ける）

２年〇組〇〇番　〇〇〇〇（〇〇班）（←14pt.・太字・センタリング）

（一行空ける）

１　探究活動のテーマ　（←12pt.・太字）

※Google ドキュメントを使用して文書を作成する。　Google Classroom → ドキュメント → 空白
※Ａ４用紙２枚程度にまとめる。
※書式設定は「空白」の初期設定値を利用する。（フォント：Arial／フォントサイズ：11pt.／余白：上下左右 2.54）
※タイトル・サブタイトル等フォントサイズ指定箇所以外の本文フォントサイズは 11（初期設定値）で入力する。
※句読点は「、」「。」で統一する。
※文章作成の基本ルールは、原稿用紙の書き方と同じ。
※段落わけをする。段落が変わるときは１マス下げる。

２　テーマ設定の理由

３　探究活動の成果に関する概要

（１）調査・研究

（２）解決策の提案・実行

（３）結果・考察

４　探究活動における個人の成果

（１）調査・研究

（２）解決策の提案・実行

（３）結果・考察（選考会・成果発表会・レポート作成）

５　探究活動を活かした今後の目標や将来の夢

２　年　　組　　番　氏名　　（　　班）

『夢現∞プロジェクト個人レポート』作成用ワークシート【提出期限：1/18(水)】

1	探究活動の テーマ	
2	テーマ設定の 理由	
3	探究活動の成果 に関する概要	（1）調査・研究 （2）解決策の提案・実行 （3）結果・考察

4	探究活動における 個人の成果	（１）調査・研究 （２）解決策の提案・実行 （３）結果・考察（選考会・成果発表会・レポート作成）
5	探究活動を活かした 今後の目標や将来の夢	

７．会議議事録（文部科学省オンライン会議）

（1）第１回 コーディネーター研修(合同・CN・高校関係者研修)
タイトル：コーディネーターとは何か・ロジックモデルとは何か
研修形態：Zoom Meeting によるオンライン研修
日時：令和４年８月 19 日(金) 13:00～16:30
場所：本校進路指導室２
主催者：文部科学省
一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム
三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング
参加者：廣濱、永田、大塚

～研修内容～

１．アンケート結果と現状分析
参加者に対して事前に行われたコーディネーターの業務内容に関するアンケートの分析。「学校全体のカリキュラムの策定支援、活動の企画立案、外部との連絡調整」などマネージャー的な役割を果たすものをコーディネーターの業務として認識している回答が８割を超えた。

２．事例研究「隠岐島前高校の普通科改革」
隠岐島前高校のコーディネーターによる事例紹介。隠岐島前高校では普通科改革事業に取り掛かる８年前より、コーディネーターを導入している。また、現在では５名のコーディネーターが常駐しており、その業務は多岐にわたる。具体的には、「総合的な探究の時間」の企画立案、授業への参加、外部との連携（小中高・行政・地域・企業・海外）などの業務が分担されている。「総合的な探究の時間」を主軸として、教科の授業と融合させるなど先進的な取り組みが見られた。

３.自校の課題分析
管理機関（高校教育課担当者）と本校担当教員（研修部新学科推進課課長）による本校の課題分析が行われた。管理機関、学校、コーディネーター間で果たすべき業務、育成すべき生徒の資質・能力の認識を擦り合わせる必要性とコーディネーターが働きやすい環境の整備について議論された。

４．ロジックモデル作成について【資料　ロジックモデル作成の手引き】
ロジックモデルの概要、作成要領に関する説明。以下のような内容が共有された。

・事業に参加する主体が「目的・目標の共有」のためにロジックモデルを作成する。
・ロジックモデルは事業の設計図として実施計画書をもとに作成する。
・作管理機関や担当教員が作成し、事業に関係する教員やコンソーシアムに照会する。
・9 月 30 日（金）までに管理機関がとりまとめて提出。
・提出後、第２回研修会（11 月）の内容を受け校内で再検討、修正を行う。

（2）第2回 コーディネーター研修(合同・CN・高校関係者研修)

タイトル：ロジックモデルの再構築とプロジェクトの進め方
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン研修
日時：令和4年11月25日(金) 9:30～12:00
場所：本校進路指導室2
主催者：文部科学省
一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング
参加者：廣濱、永田、鳥井、大塚、真子、松永

～研修内容～

1．レクチャー①「よいプロジェクトの条件GRIP」

チームビルディングを行うためのフレームワーク GRIP についての研修が行われた。GRIPとは「Goal(目的・目標)」「Roles(役割)」「Interpersonal relationship(人間関係)」「Process(段取り)」の頭文字を取ったもので、組織開発コンサルタントのベックハード氏が提唱した、組織の健全性を考えるフレームワークのことである。

2．レクチャー②「ロジックモデルの再構築」

ロジックモデルとは「インプット」「アクティビティ」「アウトプット」「中間アウトカム」「最終アウトカム」から構成される論理構造のモデルであること、またそれぞれの要素の意味を再確認した。ロジックモデルの改善ポイントについて研修を受けたり、他校の良いロジックモデルを考察したりして、八幡高校のロジックモデルの改善点を確認することができた。前回（8月）の研修を受けて作成した八幡高校のロジックモデルを、今回の研修で学んだことに沿って改善することにした。

【ロジックモデルの改善ポイント(抜粋)】

・インプットの部分をさらに整理することはできないか、抽象的になりすぎていないか。
・アウトカムが成果検証を意識した書き方になっているか。
・アウトカムにアクティビティが繋がっているか。
・関係者がロジックモデルを見たときに自分がどこに関わっているのか把握をすることができるか。

3．事例紹介

北海道大樹高等学校、北海道伊達開来高等学校、島根県立隠岐島前高等学校、岩手県立大槌高等学校による事例発表を聴講した。

4．ワーク①「他校との共有」

新時代に対応した高等学校改革推進事業の指定を受けている全国の高等学校のコーディネーターや教員と Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用し、ロジックモデルに基づいて、事業の進み具合や改善点について情報を共有した。

5．ワーク②「自校のメンバーとロジックモデルを改善する」

研修で学んだ内容を活用し、八幡高校のロジックモデルの改善を試みた。ホワイトボードを使用し、八幡高校のロジックモデルを全員で話し合いながら書き出した。また、書き出した要素やその文言について推敲し、要素同士の関係性の表現の仕方についても細かい調整を行った。

（3）第3回 コーディネーター研修(合同・CN・高校関係者研修)

タイトル：コーディネーターの要件整理・今年度の事業ふりかえり
研修形態：Zoom Meetingによるオンライン研修
日時：令和5年2月27日(月) 13:00～16:00
場所：本校進路指導室2
主催者：文部科学省
一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム
三菱UFJリサーチ&コンサルティング
参加者：廣濱、鳥井、大塚、真子

～研修内容～

１．高校コーディネーターに関する最新情報

現在、次期教育振興基本計画等にも記述があるように、公的な機関がコーディネーターの配置を推進している。今後はコーディネーターに必要な資質能力・業務内容などを明確化し、育成の仕方、キャリアなどについても考えていく必要がある。

２.高校コーディネーターの職務要件整理に関する意見徴収のお願い

コーディネーターの職務は拡大・多様化している。その内容は①学校ごとの目標・特色によるニーズ、②市町村などの別財源の有無、③教員と高校コーディネーターの能力成熟度によって変化する。今後はコーディネーターの職務を専門職務と補完職務に分け、その上で以下の三つの区分に分類していく。

Ⅰ　学校の教育・運営等に関するコーディネート
Ⅱ　学校外の学習・活動等に関するコーディネート
Ⅲ　協働体制の運営・経営に関するコーディネート

指定校・全国フォーラム参加者・運営指導委員会の意見を踏まえ、最終案を作成する。

3. 事例紹介「次年度計画の設計のアイデア」

「生徒・教員・地域の学びと活動の一体的計画案」(山形県立小国高等学校教諭)・「生徒募集と中高校生の学びの効果的な融合」(宮崎県立飯野高等学校教諭)の二つの事例紹介が行われた。

4. 今年度の事業の自営運営組織としての主な取り組みと成果・課題点について

各自ブレイクアウトルームに分かれて、代表者の発表を視聴した。代表者は各校一名ずつ選出し、概念図などを活用しながら10分間説明をした。目的は、今年度の取り組みを振り返り、課題の発見と改革のプロセスの見直しであった。

８．会議議事録（文部科学省対面会議）

（１）令和４年度高校コーディネーター全国フォーラム
タイトル：コーディネーターの職務要件、対話
研修形態：対面研修＠文部科学省旧文部省庁舎６階第２講堂
日時：令和５年３月 10 日(金) 13:00～15:30
主催者：文部科学省
参加者：廣濱、真子

～研修内容～
第Ⅰ部 ①「高校コーディネーター全国プラットフォーム構築事業について」
三菱 UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社　　喜多下　悠貴

本事業では、主に①コーディネーター研修　②全国フォーラム（今回該当）　③PDCA サイクルの構築　の３つの内容を柱として展開する。3 カ年の本事業を通して、持続的・自律的な高等学校改革の実現に向けた仕組みの構築、人材育成、学校組織改革、情報発信等を包括的に実施する。

第Ⅰ部 ②「コーディネーターの要件等の取りまとめ状況報告」
一般社団法人地域･教育魅力化プラットフォーム　　岡崎　エミ　　岩本　悠

これまでのヒアリングやアンケートにより、高校 CN の職務・職域は、拡大・多様化しており、また、学校ごとの目標や特色によるニーズ、市町村など別財源の有無、教員と高校 CN の能力成熟度等の変数により、職務・職域が変わってくることが明らかとなった。高校 CN の「専門職務」「補完職務」を明確にするため、職務要件取りまとめを実施している。現段階までの大枠に高校 CN からの意見を募り、外部発信できる職務要件一覧を完成させる。

第Ⅱ部 ①　「事例報告」
□　兵庫県立御影高等学校
・CN（2 名）の勤務は、県教委から「週 1 日の非常勤」・「カリキュラム開発専門家」としての委嘱。
・業務内容は、高校におけるコーディネート、会議におけるファシリテーション、企業との連携達成。
・週 1 日の CN とのやりとりは、slack を活用し、進捗状況を共有している。
・教員の役割は、「事業全体のデザイン」「授業や講座のまとめ」「プレイヤーの補助」
・CN の役割は、「割り当てられた個別案件のデザイン」「学校の中に、外の空気を吹き込ませる」「マネージャーの補佐」

□　北九州市立高等学校
・CN の勤務：2022 年 9 月 20 日～北九州市教育委員会から正式依頼。
・業務内容：教職員への研修業務、学校設定科目のカリキュラム開発、北九州市立大学との連携。
・CN が専門的知識をもつ大学准教授であることから、大学入試改革を教員全体が実感できたことや、大学生との新たなつながりが生まれたことに、高校側は大きな意義を感じている。
・課題：関連部署職員だけでなく、職員全体と CN をつなげたい。

□　長崎県立松浦高等学校

・CN の勤務：松浦市立の中学校の退職校長。松浦市教委での勤務経験有り。
・業務内容：生徒募集活動、地域との連携、職員の支援。
・CN が退職校長であることから、地域の中学校に顔が利き、松浦市内外の中学校や校長会にて、学校説明会を早期開催できている。
・市役所や商工会とのつながりを活かし、学校と企業とのより円滑なマッチング体制を構築

第Ⅱ部 ②　「対話の時間」

「今日話してみたいテーマ・問い」が近い人同士で 3～6 人 1 組となり、持ち寄ったテーマ・問いについて対話する。その後、1～2 名を残してグループを移動し、先に話した内容について、新しいグループ内で共有する。

これまで教育現場での経験がなく、CN としての職歴が浅い者同士でのグループでは、「コーディネーターの業務内容」について情報共有したが、業務が明確化されていないので、今はその都度やるべきことやできることを行っているという人が多い印象であった。また、教員との良好な連携体制の構築に苦戦しており、CN がどこまで学校に踏み込んでよいのか、ラインの見極めが難しいという意見も挙がった。同じ地域に同事業の採択校があるようならば、研修以外でも CN 同士の関わりをもち、情報交換を行うとよいのではないかとの助言があった。

（2）第3回 コーディネーター研修

タイトル：今年度のふりかえりと次年度計画

研修形態：対面研修@TKP 東京駅カンファレンスセンター

日時：令和5年3月11日(土) 9:00～13:00

主催者：一般財団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム

岩本悠(代表理事)、岡崎エミ(開発研究員)

参加者：廣濱、真子

～研修内容～

1．ワーク①「今年度のふりかえりと次年度計画」

5～6人1組となり、コーディネーターとして、今年度やってきたこと・来年度やろうと思っていることを1人10分で発表。他校のコーディネーターの職務や事業進捗状況について情報交換ができた。すでに何年ものコーディネーター導入の実績をもつ学校がある一方で、コーディネーターという存在や役割、普通科改革事業そのものが、学校全体に未だ浸透していないという現場もあり、業務内容や働き方について戸惑っているという声も聞かれた。

2．ワーク②「コーディネーターの資質能力って何？」

5～6人1組となり、「マインド」「知識」「技能」「思考」「判断」「表現」の観点から、「コーディネーターに必要な資質能力」について思いつくものを付箋に書き、模造紙に貼っていき意見をまとめる。次に、それらの資質能力を身につけるために役に立った研修・本、また、希望する研修内容について、同様に意見を出し合う。最後に、他の班のディスカッション内容を聞いて回り、自身の班で情報共有をする。

コーディネーターの資質能力としては、「学び続ける姿勢」「何事にも楽しむ心をもって挑戦すること」「(教員でない立場から見た）経営感覚」といった意見が挙がった。また、それらを身につけるために必要なものとして、変化し続ける世界や社会の現状を知る機会、ファシリテーションの技術向上研修、学校現場を経験したことのない人に向けた「生徒との関わり方」に関する研修を求める意見が挙がっていた。

3．クロージング①「令和5年度のコーディネーター研修について」

□ 対面研修

・演習、実習が必要な内容の実施

（例：ファシリテーション、システム思考、伴走方法等）

・視察、事例研究（7月：島根松江　11月：福島ふたば未来学園　を予定）

・CNのコミュニティづくり

□ オンライン研修

・講義形式（事前学習やオンデマンドも含める）

（例：カリキュラムマネジメント、コミュニティ・スクール、協議論等）

※高校関係機関研修は、高校CNエコシステム研究会（仮）としてリニューアル予定。

4．クロージング②「高校CNコミュニティをつくろう」

Facebook非公開グループの作成

対象：社会に開かれた教育課程を通じ、高校の特色化・魅力化に尽力するCN。

目的：コーディネーター同士の些細な情報交換、視察の相談等。投稿自由。

９. 先進校視察

普通科改革支援事業採択校に共通する課題

普通科改革支援事業の概要　予算執行　新学科設置に向けた取り組み　運営指導委員会・コンソーシアムの実施体制　コーディネーターの役割・業務　新学科における特色・魅力ある取り組み

学校名　訪問内容	日付	訪問者
北海道立釧路湖陵高等学校　○ 文理探究科（仮）・SSH	令和５年１月２３日（月）	教頭　板木　俊二 教諭　廣濱　一郎
北海道立札幌南高等学校 学問研究　テーマ探究	令和５年１月２４日（火）	
兵庫県立御影高等学校　○ クリエイション講座	令和５年２月１３日（月）	参事兼事務長　山本　博文 教諭　永田　泰寛
和歌山県立上野高等学校　○ みらい探究Ｆ・SSH	令和５年２月１４日（火）	
浜松学芸高等学校　○ 地域創造コース	令和５年３月２日（木）	教諭　鳥井　敦子 教諭　松永　一平
京都市立西京高等学校 フィールドワーク	令和５年３月３日（金）	

○印は普通科改革支援事業採択校

10. 会議録（一覧：令和４年度　新学科関係記録）

日程	時間	内容	校内	対外	オンライン	視察
04/19（火）	10：40～	第1回新学科推進課会議	○			
04/26（火）	13：15～	第2回新学科推進課会議	○			
06/21（火）	13：15～	第3回新学科推進課会議	○			
07/07（木）	19：00～	PTA役員会（新学科設置告知）		○		
07/09（土）	13：00～	コーディネーター面談	○			
08/08（月）	18：00～	在校生保護者説明会		○		
08/19（金）	13：00～16：30	第1回合同・高校関係者・CN研修			○	
08/29（月）	15：00～16：20	進路指導部（総合的な探究の時間）との打合せ	○			
08/30（火）	13：30～15：20	第2回研修部会議 兼 第4回新学科推進課会議	○			
09/05（月）	14：20～15：05	第3回研修部会議 兼 第5回新学科推進課会議	○			
09/08（木）	12：30～13：20	第4回研修部会議 兼 第6回新学科推進課会議	○			
09/20（火）	13：30～14：15	第7回新学科推進課会議	○			
09/22（木）	15：50～16：40	R４新学科説明に係る中学校訪問職員打合せ	○			
09/29（木）	09：00～11：00	第1回コンソーシアム運営指導委員合同会議		○		
10/04（火）	13：30～14：15	第8回新学科推進課会議	○			
10/05（水）	14：15～15：15	第2回コンソーシアム運営会議		○		
10/12（水）	10：30～12：00	塾対象新学科説明会		○		
10/18（火）	13：30～14：15	第9回新学科推進課会議	○			
11/04（金）	午後	兵庫県立加古川高校対応				○
11/08（火）	午後	北海道釧路湖陵高校対応				○
11/08（火）	13：15～14：05	第10回新学科推進課会議	○			
11/09（水）	16：30～17：30	第3回コンソーシアム運営会議		○		
11/10（木）	13：00～15：00	事業進捗に関するヒアリング			○	
11/25（金）	09：30～15：30	第2回合同・高校関係者・CN研修			○	
12/06（火）	14：15～15：05	第11回新学科推進課会議	○			

日程	時間	内容	校内	対外	オンライン	視察
12/13（火）	14：15～15：05	第12回新学科推進課会議	○			
12/14（水）	16：40～17：30	第4回コンソーシアム運営会議		○		
01/10（火）	14：15～15：05	第13回新学科推進課会議	○			
01/22（日） ～01/25（水）	終日	先進校視察 （北海道釧路湖陵高校、北海道札幌南高校）				●
01/31（火）	13：15～14：05	第14回新学科推進課会議	○			
02/13（月） ～02/14（火）	終日	先進校視察 （兵庫県立御影高校、三重県立上野高校）				●
02/20（月）	15：00～16：20	第2回運営指導委員会		○		
02/27（月）	13：00～16：00	第3回合同・高校関係者・CN研修			○	
03/02（木） ～03/03（金）	終日	先進校視察 (静岡県浜松学芸高等学校、京都市西京高等学校)				●
03/10（金） ～03/11（土）	終日	高校コーディネーター全国フォーラム 第3回コーディネーター研修 於東京都		○		

【福岡県立八幡高等学校】学際領域学科（設置（令和6年度））

１年生
- 探究スキル トレーニング
- 教科科目 横断型授業

２年生
- 夢現∞ プロジェクト
- 教科科目 横断型授業

３年生
- 学校のリーダー
- 教科科目 横断型授業

卒業
- 文理分断思考から脱却した思考
- 持続可能な社会をしなやかに 根気強く創ろうとする姿勢

幸せな社会を創る

教科科目横断型授業

複数の教科科目を融合することで初めて見えてくる物事や事象の諸相を分析することで、学問と社会との繋がりや、生きる上での学問の意義を感得させ、自ら主体的に学問に向き合っていく姿勢を育成し、実践につなげる。

夢現∞プロジェクト

SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴って生じる課題に着目し、将来の国際社会及び日本社会における課題の発見・解決に資する知識、技能の習得と、その活用に関わる思考力、判断力、表現力を育成し、実践につなげる。

生徒が育つ八幡高校の取り組み

コーディネーター
- ❶学校と地域をつなぐ
- ❷学校と地域の連絡調整
- ❸夢現∞プロジェクトを教員とサポート

運営指導委員会

管理機関・地元企業・教育機関で構成される
- ❶コンソーシアムへの指導・助言
- ❷カリキュラム検討に関する指導・助言
- ❸事業全体に関する指導・助言

指導・助言

コンソーシアム

八幡高校職員・管理機関・地元企業・教育機関で構成される
- ❶カリキュラムの検討
- ❷評価方法に関する検討
- ❸事業進捗状況の確認
- ❹夢現∞プロジェクトへの協力
- ❺生徒との懇談会に参加

八幡高校を支える地域・行政

成果

❶多角的なものの見方・捉え方ができ、学問のおもしろさや美しさを実感できるようになった。
❷生徒が問題解決のために主体的に探究活動を行うことができた。
❸ICTの活用が時間・資源の節約、情報の管理の利便性において大変有効であった。
❹運営指導委員・コンソーシアム構成員との連携を計画的に図ることができた。

課題

❶教科科目横断型授業と夢現∞プロジェクトの内容の深化・進化をより進める。
❷職員全体への情報提供を行うことができていない。
(誰もが資料を閲覧できる方法の検討)
❸意識調査の実施が不十分。